
セカンドライフ、僕らの季節

瑞山冬人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

セカンドライフ、僕らの季節

【NZコード】

N4791C

【作者名】

瑞山冬人

【あらすじ】

この春にめでたく卒業式を迎える事が出来た高校三年の冬羽刹雪は三年間共に過ごした友達に別れを告げ、明日から始まる新しい生活に期待と不安を持ちながらその短かつた一日を終える。次の日の朝、どうもおかしいと異変を感じながら鏡の前に立った刹雪の目に飛び込んで来たのは、物心ついた頃の自分だった……。

初公演「プロローグ」（前書き）

初投稿ですので、読みづらいかもしだれませんが頑張りますので宜しくお願いします。

初公演「プロローグ」

春という季節は別れと出会いの季節。それは世間一般的の常識として知られている。有名アーティストが出す曲にだってさようならとかまた会いましょうとかそんな風の言葉が数多く入っている。高校生であり俺は、そんな季節を生きている。そして今は三年間通い続けた高校の卒業式を行っている。

先程から卒業生が一人ずつ卒業証書を受け取るために名前を呼ばれている。少しだけ左右を見ると、女子生徒が泣き始めている人が多い。ちらほらと男も泣き出す奴がいる。俺が思うに一番の感動シンコンは生徒会長代表挨拶だと思つ。あくまで俺個人の意見だけど。

「生徒会長代表の言葉」

そら来た。俺は少しだけ身構える。別に全然関係ないのならばそんな必要もないのだろうけど、生憎とこの高校の生徒会長つてのは紛れもなく、俺だ。

ゆっくりとした動作でパイプ椅子を立ち上がり、生徒一同。保護者一同。そして報道陣の視線を受けながら壇上に上がり、生徒代表として生徒会長の最後の仕事を全うする。

正直に言おう。かなり緊張した。油断すると噛みそうになるんじゃないかと不安になつた。まさかこんなクライマックスのシーンで生徒会長が言葉を噛みましたなんていつたら、全てが台無しになつてしまつ。それだけは絶対に阻止しなければならないだろ？

「以上の言葉を持ちまして、挨拶と代えさせてもらいます。卒業生

徒代表、
冬羽刹雪

見事に冬関連の感じで覆い尽くされた俺の苗字と名前だが、こんなふざけた名前を付けた両親をまず恨みたいね。前に何処かのアホに「せつせつ」なんて間違われて以来、一時期そんなあだ名がつい

てしまつたんだぞ。

とまあ、俺の名前の愚痴なんか何処吹く風で何とか式を台無しにする事もなく、大役を全うした俺を拍手が包んでくれる。何か照れるね、こういうのつて。

卒業式が終わると、自分達の教室に戻つて最後のHRの時間である。それぞれが明日からはこの教室に来ないと知りながらも、いつも通りの他愛もない話題で盛り上がり上がっていた。

一部の男子生徒はもう担任の教師と顔を会わす機会もないと思い、ぶつちやけた話をさつきから延々としている。

時間が過ぎるのは本当に早いもので、HRも終わり、正門で在校生が卒業生を拍手で送るというセレモニーがあり、俺は友達二人に挟まれて道の真中を歩いていた。

「あ、あの……冬羽先輩！」

「俺？」

声がした左の方を見ると、一人の女子生徒が何か恥ずかしそうに頬を紅潮させながら、落ち着きのないしげさをしていた。

「何か？」

「あ、あの……これ……」

そう言われて手渡されたものは一枚の紙だった。それもピンク色の可愛らしいもので、まあ世間一般的にはラブレターと呼ばれる物ですか？ なんとまあメールで全てを終わらす時代に古風というか。

「はつ！？」

背後に殺氣を感じ振り返ると、そこには高校に入つてからの友人二名が憎しみに満ちたギラギラした目で俺を睨みつけていた。

「ま、待て！ 話せば分かる。これは、別に……あ、ああそうだ！」

これはあれだ部活の後輩が今までありがとうございましたって図

書券をだな。

「うそ！ 」お裏切り者！！

「 そ う だ 、 そ う だ ！ 高 校 在 学 中 は 彼 女 作 ら な い と か ほ ざ い て た く せ こ ！ 」

「んな」と二つてないし！？ 第一もう卒業だろー。」

「遠足は家に帰るまでが遠足だ！」

いや、遠足関係ないし！？ 卒業式だし、何で俺が悪者？ え？

「いや、轟の大王が、おつまみの阿波一後輩をゾウのあつとだらうかし

た

高校在学中は彼女作成なしとか思ってたくせ

「おい、片方さつきから同じ事しか言ってないぞ。お前らの人生そんなでいいのかよ。

「お前に、人生の心配をしてもらわなくとも結構だ！」

「そうだそうだ！ 以下略」

省略し始めたぞ。やれやれと俺が溜息をつくと、周りから笑い声と拍手が送られる。どうやら俺達が卒業記念に漫才でもやっていたのだと思われているな。まあウケたのなら別に良いか。

学校を出た俺と黒鹿一人は、いつも通りに街を散策し始める。別に何処で遊ぶとかは決めていない。ただ街を歩いてどうでもいい話をして笑い合っているだけだ。

本当に時間が過ぎるのは早いもので、何時の間にか夕方になつて
いた。誰が言い出したのかは分からぬが、街の中心にある小高い
山の中腹に作られた公園のベンチに座りながら、街を一望していた。
正面を見ると、三年間過ごした高校。今更ながらに思う。俺達卒

「あ、俺そろそろ……」

「バスの時間が？」

「しゃあねえな、バス停まで行つてやるよ」

山を降りた近くにコンビニがあり、そこのコンビニの目の前にバス停がある。そこまで歩いて行き、バスが来るまで三人で待つ。その間もどうでも良い話をしていた。

「彼女作れなかつたとか、成績がどうだつたとか。

「まあでも、ようやくユキにも春が来たつて感じか

「いいよな～、あの後輩結構可愛かつたじゃん？」

「はあ、やっぱり連絡しなきやいけないかね？」

二人が一斉に怪訝そうな表情で殺気に満ちた目で睨みつけてくる。その雰囲気は多少気後れしつつも、一人にも今まで話したことがない話題を持ちかける。

「実は、俺、女性恐怖症なんだよね」

一瞬の沈黙。二人は互いに顔を見合わせ、俺に声が聞こえないよう背を向けて肩に手を掛け合い何かを相談すること一分。

「なるほど、だからお前には彼女が出来なかつたのか」

「そればかりが問題つて訳じやないだろうが……」

「いや、それだな。だつてユキつて結構顔悪くないしな」

うわ。何かお前らにそんなこと言わると天変地異の前触れのような気がしてならないのだが、ここは素直にお世辞を受け取つておこう。

「そうしろ」

「お、来た」

そういうしている内にバスが時刻表よりも二分ほど遅れてバス停の正面に停車する。俺は、そのバスに乗り込み、整理券を機械から取ると、

「また、明日な！」

「じゃあな！　また」

驚いて俺は後ろを振り返る。一人が言つたことがうまく理解できなかつた。「また、明日」に「また」だつて？ こいつら今日で卒業だつてこと理解しているのかね。俺が何かを言い返す前にドアが閉まり、バスが発車する。

少しばは空氣を読めよな、俺は軽く舌打ちをしながら急いで一番後ろの席に行き、座席に膝をついて後ろの窓から一人の様子を眺める。一人は手を振つていた。それはいつもの光景と変わらない。だから、俺はも手を振り返した。

一人の姿が見えなくなると、俺は座席に座りバスを見渡す。今日でこのバスに乗るのも最後なんだな。

バスで一時間程走つた所に俺の住んでいる街がある。かなり遠い所から通学してきたんだよな。バスが走るたびに、初めてバスに乗つて高校に行つた時の事を思い出す。今までの記憶が鮮明に蘇る。

「やばいな……」

もしバスが降りるべきバス停に着くのがもつと遅かつたらきつと泣いていただろう。俺はバスから降りて、近くに停めてある自転車にまたがり家へと帰り着く。

風呂に入つて、夕飯を食べて明日に備えて早く寝る事にする。

殺風景な部屋にぽつんとあるベットに寝転がり、部屋を見渡す。明日からは警察学校の寮に入る事になつてゐるから、荷物は既に全部送つた為に随分殺風景になつてしまつた。

明かりを消して、俺は明日から始まるまったく新しい生活に期待と、同じくらいの不安を持ちながら、目を閉じた。

さて、プロローグにしては随分長くなつてしまつたが。これから事を覚えれば、この日の事は、まさしくプロローグに過ぎなかつたのだろう。

初公演「プロローグ」（後書き）

CAST

主演／冬羽刹雪

出演／友人A／友人B

友情出演／謎の後輩

第1公演「セカンドライフ」

雪に覆われた冬が終わり。暖かい春の季節のとある日のこと。俺は河原市立河原中学校の入学式に参加していた。

別に弟や妹が入学する訳じゃない。確かに妹はいるが、まだ小六だ。では誰の為に中学の入学式に参加しているのか、それは紛れも無く俺自身のためである。

ハゲ頭の校長の話しなんか右から左へと聞き流して、遠い日の。そう今から遡ること七年前のあの日を思い出す。

その日の朝覚めは悪くは無かった。どちらかと言えばスッキリ目が覚め苦も無くベットから抜け出した。

実はこの時から少しだけ異変に気がついていた。

なんか目線が低く感じるがまあ、気のせいだらうまだ寝起きで頭がぼやけているせいだ。顔を洗おうと洗面所に入つたときに次の異変に気がつく。

「……あれ？」

なんか洗面所高いんですけど。背伸びしてもやっと洗面台の端っこ掴むのがやつとだ。何かがおかしい。そう感じた瞬間。マイスターが俺の背後を通りていく。うん。妹ね。

「お兄ちゃん。おはようございます」

いつになく礼儀正しい挨拶をしたので、寒気を感じながら返事を返そうと振り返ると同時に俺は絶句してしまつた。無言の絶句だから無言絶句。

なんと我が妹が幼稚園くらいの小さい子供に変貌を遂げていたのだ。二人兄妹だし、歳だって一つしか離れていないのに。俺の頭の上をたくさんのクエスチョンマークが旋回し始める。

一体何がどうなっているのか、洗面台の脇に備え付けられている台

に登り鏡を覗き込む。

「な、なんじやこりや

！？」

急いで自分の部屋に駆け戻り、部屋の中を確認する。昨日まで殺風景だった部屋に子供のおもちゃなどが散乱している。呆然自失のままカレンダーで年を確認すると、十二年前の四月四日だった。

どうやら、タイムスリップ（？）してしまったようだ。俺を含む全ての時間が。だが、何故俺の記憶だけがそのまま取り残されているのだろうか。どこぞの高校生みたく変な薬飲まされて若返ったのなら記憶があつて当然だが、俺はそのケースじゃない。第一周囲の環境全てが変わっているのだ。俺の記憶だけを取り残して。

一体誰が人生のリセットボタンを押したというのだ。断つておくが俺じゃない。俺はそんな便利なボタン持つていない。

だとすると最後の手段。これは夢なんじやないだろうか。思い付いたが最後俺はベットに飛び乗り、フローリングの床に向かつて腹からダイブした。夢なら覚めて欲しかったが、少し方法が間違つていた。

腹から床に転がっていたパトカーの上に倒れ込み、腹部にパトランプがクリティカルヒットする。

「な、なんじやこりや

つ！？」

取り敢えず。めちゃくちゃ痛かつたので夢では無いらしい。

もはやこうなるとお手上げだった。元の時間に帰る方法なんかわからはずもなく、このままもう一度人生をやり直すしかないだろう。また、明日な。不意に昨日友達が言った言葉が去来する。すまん、お前ら。お前達に会うのは明日どころか十年後くらいになりそうだ。嫌に物分かりがいいと、呆れるかもしれないが。下手に奇抜な事をして周囲から孤立し。揚句の果てに戻れませんでしたじや目も当てられない。ようは年相応の振る舞いをすればいいのだ。と決めたはずなのだが、小学校に入学し三年生になつた時のとある授業で、先生が社会の年号を間違えていて、それを指摘するさいに何か余計なことを口走つたみたいで俺は天才として注目されることになつて

しまった。

やがて、月日は流れ中学校の入学式の日。つまりは現在に至る。入学式が終わったら、教室に行き、クラス委員だけでも今日決める事になった。

憮然とした表情であまり関わらないようにしていただが、やはり歴史は変えられない様で、クラス委員は俺が務める事になった。前もそうだったから予想はしていたが、面倒くさい。何せこの後に担任教師岡島から雑用を言い渡される歴史も変わってないらしいからな。女子のクラス委員と放課後少し残つて雑用。主にクラスに掲示する時間割りの作成をしていた。初対面では無いが、向こうにとつては初対面なので少し気まずい雰囲気だ。

作業すること十五分。ようやく時間割りが完成し、背筋を伸ばしていると、教室の前のドアが吹っ飛ぶ様に開く。

「冬羽刹雪つ……！」

いきなり俺の名前を呼び捨てで呼んだのは、この学校の制服を着た女子生徒。恐らく先輩だろう。過去の記憶を探つても今日この日。こんな風に呼び捨てで先輩に名前を言われた覚えが無いのだが。

「僕……ですか？」

女子生徒は教室に入つて来て、俺の席の目の前まで歩み寄つてくれる。

「君が河原一小始まつて以来の天才。冬羽刹雪君か」

天才かどうかはよく知らないが、河原一小の冬羽つて言つたら俺しかいない。

「私は生徒会所屬情報部の部長を務める名月院加奈」

「はあ……？」

名月院か随分変わつた苗字だな。

「早速だが、君に河原中学情報部に入部してもらいたい。天才と呼ばれる君みたいな貴重な人材を、ぜひとも捕獲……いや、確保したい」どうやらイレギュラーが発生した様だ。前の中学生活では、こんな誘い来なかつた。情報部の存在は知つていたが、いつもいつも部

長が訳の分からぬ事をしているので有名だった。

噂は耳にしていても、実際に部長と会うのはこれが初めてだ。正直以外に思つた。長い黒髪に整つた顔立ち。身長は俺と同じくらいだがスタイルが抜群に良いし、なにより俺のストライクゾーン直球ど真ん中だ。部長の姿に負け、入部を決意してしまつた俺を誰が責められよう。きっと立場が違えば誰だつてそうするに違ひないさ。

「早速部室へ行こうか」

「あ……ちょ、まつ」

すぐに腕を掴まれて、部室へと連行される。部室の鍵を部長が開け、中に入ると俺もその後に続く。まず俺の視界に飛び込んで来たのは、部室の真中を陣取つて「タツ」だつた。その「タツ」の上にはノートパソコンが一台が置いてあり、その周辺にはお菓子やらが散乱している。

部室にはどういう訳か、食器棚もあり冷蔵庫も置いてある。以前俺が所属していたサッカー部の部室より二・五倍ほどありそつたが、その辺に散乱しているお菓子の袋やカツチメンの残骸。ペットボトルのせいで、実際にはかなり狭く見える。

「ちょっと散らかってるけどね、気にしないで」

「……」

これをちょっとで済ます気なのだろうが、この人は。どうからどう見ても踏む足場も無いと言う感じなのだが、とりあえず適当な所に渡された可愛らしいクッショングを置いて座り、もう一度部室を見渡す。

壁には白いホワイトボードが賭けられている。その隣には新聞らしき紙が綺麗に順序よく並べて貼られている。

部長は食器棚から紙コップを取り出し、冷蔵庫から烏龍茶を持つてくる。烏龍茶をコップに注ぐとそれを手渡してくれる。

「ありがとうございます」

「基本的に冷蔵庫の中の物は勝手に食べていいくからね。それとそのパソコンも使っていいよ、ネットにも繋げるし。あ、でも変なサ

イト開いたら窓の外に放り投げるから

きびきびと発音良く聞こえてくる声は、それだけでどこか安心を与えてくれそうだった。聞いていて不快になる人とならない人の声つてあるんだよな。

にしても、この部活の他の人はどうしたのだろうか、学校内において新入生でも勧誘しているのか。

「ああ、この部活。私と君の二人だけね。大体学校側の正式な許可を取つてないし。いわゆるゲリラ活動つてやつかな」

「……」

「What? 今、何と申したのですか。最近耳が遠くなり始めて、よく聞き取れないですが。なんか部員が俺だけで、生徒会所属とか言つておきながら、学校側からは非公認とか聞こえたが。

「まさしくその通り。正式名称は河原特捜情報部だからね」

「……ちなみに、活動内容は?」

「各部活動の取材をしたり助つ人に入つたり。生徒会の汚職を暴き倒したり。後は未確認生命体の存在を見つけてみたり、幽霊に取材してみたり。宇宙人と交信してみたり。それらをネットとかに流したり、誰かに情報として売り払つたりかな」

すみません。退部届けの書き片を是非とも教えてもらえませんかね。と、前の俺だったら言つていただろうし、こんな人と関わらない決意しただろう。だが、今の俺は違う。ただ同じ事の繰り返しだつた退屈な日々から抜け出せるかもしれない。

そんな期待を抱いていた。それに部長なら俺が疑問に思つている事の答えも見つけてくれるかもしれないしな。

とにかく今日から忙しくなりそうだ。渡された烏龍茶を飲み干す。

俺の第二の人生。セカンドライフはこうして始まりを告げたのだった。

第1公演「セカンドライツ」（後書き）

主演／冬羽刹雪

出演／名月院加奈／冬羽妹／クラス委員

特別出演／岡島

第2公演「前世と現在?」

河原特捜情報部という一見訳の分からん部活動に、入部した俺は今日も忙しくサッカーの練習に勤しんでいた。何でサッカーの練習してるんだよ。さては、お前サッカー部に乗り換えたとか思わないでくれよ。断じて言う。俺は未だに河原特捜情報部の部員である。では、何故サッカーの練習をしているのか答えは簡単だ。

俺が部活動に入部した次の日。放課後部室に顔を出してみれば、先に部室に居た部長から言い渡されたのだ。

「今日から人数が少ない部活に助つ人として赴くよう。来る日に備えてしっかりと練習に励みましょう。以上！」

と言うのだから、仕方なく慢性的な人数不足に悩まされていたサッカー部に助つ人として乱入り、一ヶ月ほどこうして活動している。以前にも話したと思うが俺は以前、中学、高校とサッカー部に所属していた。よってこの時期のサッカー少年にしては高い技術を持っている。タイムスリップしたあの日から何かの役に立つだろうと思い、身体だけは毎日鍛えてきたからな。俺の頭の中で思い描くプレーに充分身体がついて来てくれる。

最初は同じクラスの奴。勿論俺はそいつらを事前に知っているが、そいつらには俺の記憶が無いわけだ。だから最初の一週間ほどは、この学校において並ぶ者のいない奇人・名月院加奈の仲間となつた俺に対する視線はそれはそれは、冷ややかな物だつた。だが、一ヶ月たつた今ではクラスの奴らと普通に仲良くなつた。

「さすが、先輩二人を抜けるなんてすごいな」

先程のセットプレイの練習で先輩二人を抜き、ゴールを決めた俺に同じクラスで前の席の金木が絶賛を送つてくる。こいつとは以前も親しい仲だつた。部活も一緒に席も近いからな。

「サッカー部入れば？」

まあ俺も前世はサッカー部だったから、確かにサッカーがしたくないと言えば嘘になる。しかし、ここで俺がサッカー部に入つてしまつたら多分、一生後悔し続ける。

「前世？」

「気にするな。ただの世迷言だ」

それにお前は既に忘れているかも知れないが、俺は他の部活に入つてているのだ。この学校では掛け持ち（助つ人は良い）は禁止されているから今更入るに入れない。

「そうそう。こいつは小学校一の天才だったのに、中学に入つた途端に誰かに毒されちまつたのさ」

失礼な事を言いながら、後ろから追いついてきたのは小学校の時の同級生で、こいつも勿論サッカー部であり俺の席の後ろの席の川吉だ。前世では金木と川吉と俺の三人コンビが当たり前だったな。ああ、ちなみに川吉が言つてゐる誰かは、言つまでも無い。部長だ。

どうやら部長が打ち立てた伝説は俺の通う小学校にも轟いていたらしい。部長が打ち立てた伝説を知らなかつたのは不覚にも俺だけらしい。どんな伝説を打ち立てたかといえば、校長のカツラ疑惑を確信に変えたり（全校集会で行われた、主にそれぞれの学年ごとに成績が優秀な生徒を一人選び、校長が賞状を授与する式で、部長がわざと姿勢を崩し倒れこみ、校長のカツラを奪い去つた）とか、真夜中校内を巡回していた警備員と大立ち回りを演じたとか、部室棟の一室を不法に占拠しているとか、生徒会の汚職疑惑を新聞風に学校掲示板に貼り付けたとか。

他にも様々な伝説を打ち立ててゐるらしい。まあ何と言つうか。凄

い根性と言つたが、歩く凶器だねの人。噂じゃ全校生徒の名前と顔を全部覚えているとか。勿論新入生も含めてだ。

「でもさ、確かあの人って頭良いんだろ？」

セットプレイを今度は三人で挑戦したが、金木のミスのせいでしボールを取られコートの外に出て、また順番の列に並ぼうと歩いている時、川吉が不意に聞いてくる。

「らしいな」

さつきのプレイのミスで落ち込んでいる金木を横目に俺は投げやりな返事をする。

「学年トップだろ？ 淫えよな。やっぱりそんな人は俺等とは考える事が違うのかね？」

「かもしれないな」

これは聞いた話だが、部長は中学に入つてから一度たりとも、定期テストの五教科の合計点数が四百九十九点を下回つた事が無いといつ。部長の事を正しく天才と呼ぶのだろう。俺も天才なんて呼ばれているが、実際の年齢は十八……いや、それに七年が加算されていてるから。ま、まあ細かい事はどうでも良いとして、他の奴らより長く生きているのだから、俺は偽天才なのさ。

次のセットプレイではミスをした金木が今回はショートを決めコートの外に出る。

「ああ、そういうやさ。九組の松下つて奴がいるだろ？」

「知らないな」

「いるんだよ」

金木と川吉の話を黙つて聞きながら歩く。

「そいつがさ、昨日あの人によつたんだよ」

「マジで？ 早くね？」

おおよそ俺の反応も金木と同じだ。まさか入学から一ヶ月で先輩に告白するとは、随分自分に自信があるのか、それともただのナル

シストのアホかのどちらかだな。俺の意見に川吉が少し賛同し、続ける。

「で、どうなつたと思つ?」

「振られた」

右に同じく。第一この手の話は撃沈しないと面白くも何とも無い。こういうのは人が振られた話をして、それを笑つてやるのがせめてもの手向けなのさ。

「ところがどつこい。条件付なら良いつて言われたらしいんだよ」

「ふん。どんな条件だ?」

それは俺も知りたいところだ。事と場合によつては部長に告白したという奴を始末せねばならん。俺を差し置いて、何を。

女性恐怖症? ああ、そんなん遠い昔の出来事だ。正確には七年だ。あれだ、七年あれば君もハイハイから立ち上がって、喋りだして踊りだしてしまいには空を飛んでしまいそうな年数だからな。何か最後の方不適切だつたな。忘れてくれ世迷い言だ。

「いや、何か紙に書いて渡されたみたいでよ。昨日その紙のコピーもうつたんだ。部活終わつたら見せてやるよ」

「紙? 何か色んなことやらされるのかな? かぐや姫みたく」

「部長ならあり得るな」

付き合つ条件。未確認生命体、一般的にU.M.A.と言つらじいが、そのU.M.A.を見つけてきてください。みたいな事が書かれているのではなかろうか。もしそうならば氣の毒な事だ松上君とやら。あれ、松下だつけ。どつちでもいいか。

練習が終わり一、三年生が部室を使い、一年の俺達は部室の外で着替え始める。俺は上だけ学ランを着て、金木はズボンだけ履いて、川吉はガラパン一丁で先程話していた紙を見せてくる。その紙には綺麗な字でこう書かれていた。

『BOYがいそのだと仮定した時に、DIRBは何を意味する物

でしょうか？』

「なんだこれ？」

「IJの答えを当てようと松下は俺とか色んな奴に聞いて回ってるみたいだが、未だ解明できていらないみたいだ」

白い紙には一見して意味不明なアルファベットが綺麗に書き並べられている。BOYが「いその」だとしたら、この一見でたらめなアルファベットにも何か意味があるはずだが。

そこで問題を本氣で解こうとしている自分に氣づき、自嘲氣味に笑う。どうして俺が他人に出された問題に頭を使つて解かなければならぬんだ。労力の無駄だ。

着替えそつちのけで紙に書かれたアルファベットと睨めっこを続けている金木と川吉は放つておいて、さっさと着替える事にするかね。

「分かつた！ これローマ字じゃね！？」

川口が騒ぎ出し、金木は怪訝そうな表情を向け。俺は川吉がどれほどのアホな推理をするのかが気になり、内心笑いを抑えるのが難しい。

「ほら、DIはつてのはばななんだよ。そいでもつてBJつてのがぶだ」

「Rは何処に行つた？」

「GTRみたいにちぶRとか？」

アホか。大体ちぶつてなんだよ、一体何を差してるんだよその單語は。

「だつたらお前解いて見ろよ」

「何で俺が人の為なんかに」

「冬羽も解らないだろ」

まさか金木よ。川吉とお前を俺と一緒にするな。ついでに言つておくが、その問題なら答えは凄く簡単な物なのだ、少しの発想の転換をすれば誰でも解ける問題だ。その松下君とやらにもそう助言してやつておいてくれ。

顧問の教師が最後に解散の挨拶をして、解放される。一応情報部の部室にも行つてみたが、鍵が掛かつたので、今日は帰ることにした。

ちょうど自転車乗り場で金木と川吉が居たので、途中まで二人で帰ることにする。まず、金木が自分の家に着き消えて行き、

「じゃあな」

「また水曜日な」

明日から五月のベリーグット連休。つまりはゴールデンウイークが始まるので、次の学校登校日は来週の水曜日である。

「部活来いよな！」

「ああ、考えておく」

川吉も夜の闇に紛れて消えてしまった。また一人また一人消えて行き、最後に消えるのは……俺しかいないじゃないか。などとくだらない事を考えながらマイ自転車「パシリ君一號」を漕ぎながら帰途についた。

「ただいま」

家に帰り玄関を開けると、リビングから妹が駆け寄つてくる。そうかそうか、そんなに兄の帰りが恋しかったか妹よ。

「うるさい。あんたに電話

「あつ。そう」

全く何時から妹はこんなに反抗的になつてしまつたのだろうか。昔はあんなに可愛かつたのになあ、もう少しおしとやかに育つて欲しかつたのだが。俺は自分の願望を呴きながら電話の子機を耳に当てる。

「もしもし」

金木か川吉かと思ったが、受話器の向こう側に居た人物は、全然予想してなかつたとは言わないが。少しだけ意外な人物だった。

「突然だけど、ゴールデンウィークに取材に行きますわよ」

使用用法を明らかに間違つてゐる敬語にはあえて突つ込みを入れずに、話を進める。

「どーにですか？」

恐らく俺の問いに部長は電話の向いの側で笑つたはずだ。それもいたずらっぽく。

「U.M.A（未確認生命体）が出没する所」

第2公演「前世と現在？」（後書き）

主演／冬羽刹雪

出演／名月院加奈／金木／川吉

特別出演／冬羽妹／松下

第3公演「軽トラ君の爆走」

田が覚めると。そこは電車の座席だった。向かいあつている座席に座つてるのは部長である。

朝早いのと終点で降りるという安心感からか、よく熟睡している。

ベリーグッドな大型連休初日。つまりは「ゴールデンウイーク初日」の朝早くから、俺と部長は電車に乗り。ある場所を目指していた。

そこには、UMAがいるらしい。実はそこは以前テレビでも放送されている。

その時の番組は「激闘！ 未確認生命を追え」とか言つ名前だつた。実際には発見されなかつたけどな。

そんないわくつきの山に部長は行くと言つ出した。
一ヶ月前からの助つ人作戦はこの目的の為にだけといつ理由で展開されていたのだ。

視線を部長のかわいらしい寝顔から窓の外にスライドさせる。
先程までは、田舎ならではのタンボの景色だつたのがビルなどが並ぶ都市の景色へと変わつた。

目的地まではまだまだだと考えながら、欠伸を噛み締める。眠い。眠いが寝てはいけない。一人揃つて寝たら膨大な量の荷物が消えてしまいそうだ。

部長から、山に行くと言われたのは、昨日の夜の電話でだ。

そのあとすぐにテントとかを引っ張り出し、準備は万端。いざゆかんと今日の朝早くに駅に行くと、先に来ていた部長が俺の荷物の多さに少し呆れられた。

普通山にいくのならテントが必要なのに、部長はテントはおろか、まるでただの旅行に行くくらいの荷物しか持つていない。そこが不思議でならない所だ。

だから膨大な量のうちほとんどが俺の荷物である。

それにしても、眠い。凄く眠い。さっき自販機で買ったアイスコーヒーを飲んでも、全然目が覚めないしスッキリもしない。

俺が睡魔と必死に格闘しているのをよそに、部長はすやすやと規

熙正しい寝息を立てている。その寝顔を見て、荷物の中から小説を取り出して読む事にする。

それからも電車は快調に走り、次の駅で終点らしい。つまり俺と

「部長。起きてください」

返事無し。

「部長、起きてください……。」

俺は部長の肩に両手を置き腰を据げる。

「部長……起きてください……」降りる駅ですよ。」

それに気がついてみれば、周りからの視線が痛い。

電車が駅のホームに滑り込み、ドアが開く。乗っていた他の客は焼マニ峰つて、俺達も峰つて、マニ峰サ、マニ峰サ、マニ峰サ。

目 前 に は 気 持 ち よ そ う に 寝 て い る 部 長。 周 囲 に は も う 誰 も い

ない。

「仕方ないな」

荷物を全て肘に掛けると、テントを部長の背中に固定する。俺は部長の腰を回し、両腕で抱え入じた。一方、さぶる。

「重つ！！」

可愛い女の子が羽のようにな軽い。なんて事せやつぱつ無いな。や

はり部長でもそれなりに重いし。まあ、本人の前で重いなんて言つたう、夫は亟まるがごと。

「……なにしてるの？」

もう少しでドアからホームに降り立つ事が出来る時に、後ろから

声が聞こえてくる。顔だけを後ろに向け、背中に面する部長を見る。

部長は少し引きつった笑顔をしていた。

「えつとですね、いや、これは降りる駅なのに部長が起きないので

最後の手段で……」

「ふ～ん」

部長が背中から降りると、駅のホームに降り立ち歩き出す。俺も部長の後ろに続いて歩き、駅の改札を潜り抜け、駅の外に出る。

「で、これからどうするんですか？」

「山に入るよ？」

指差す先には、この街では象徴的な山。マニアの間でも結構有名らしい。

そもそもその事の始まりは、三年前。この山に観光に来ていた客が今まで見たことも無い、生命体と遭遇した事により、一気に広まりその生物はビデオにも納められており、一時期はかなり話題になつた。

キヨロキヨロと何かを探していた部長は、それを見つける。

「あつたあつた。ほら行くよ」

「分かりました」

部長は当然の様に、駅前の駐車場に停めてある軽トラに乗り込む。

「荷物は荷台ね、早く乗つて」

言われるままに、荷台に荷物を置いて助手席に乗ると部長は車のキーを取り出し軽トラのエンジンに火をつける。

「あ、あの部長。まさか……」

「シートベルトはしたほうがいいよ」

アクセルを踏み抜くと、車が急発進する。勿論運転しているのは部長。つてちょっと待て、俺達中学生だぞ、中学生！ 無免許……。

「うわっ！」

急に車体が横に傾き、窓ガラスに頭をぶつけた。無免許運転だけでも驚きだつてのに、先程から軽トラが凄い速さで他の車を追い越していく。

ちょ、ちょっと部長。もう少し安全運転で。

「後ろ見てみて」

言われたとおりにサイドミラーから後ろの様子を見ると、後ろには他の車を追い越して、この車を追跡していると思われる黒塗りの車があった。

まさか、怖いお兄さん達にもで追われているんじゃないだろうな。「この「軽トラ君名月院スペシャル三号機」をただの軽トラと思わないことね」

部長が訳のわからない事を叫んだ途端。ブレーキが掛けられ、車の加重が移動する。それに合わせて、車が横を向き交差点の右に抜けようとする。

前言撤回、右を向いていた車が左に切り返し、交差点の左を抜ける。他の車にぶつからなかつただけでも奇跡かもしれないな。

追跡している車も、交差点を難なく抜けてくる。どうやらこの軽トラの性能では、後ろの車を振り切る事は出来そうにない。

その事を自分も悟ったのか、難しい顔をしていた部長が突然、

「ああ！ もうしつこい。運転任せる！」

ドライバー交代に俺を指名する。

「え！？ む、無理ですよ！？」

「大丈夫。真っ直ぐ走らせるだけでいいから！」

答えになつていないうな気がする。つて、部長俺の答え聞く前に運転席側のドア開けて、そのまま荷台に移動しちやつたよ。ああ、もうこじうなりややけくそだ。

ハンドルを握りアクセルを踏み込み、クラッチを繋ぎ二速から四速にシフトエンジする。ただいまの時速九十三キロ。法廷時速六十キロ。警察に捕まつたら一発アウトだな俺の人生。

突然パンつ。という乾いた音が聞こえたと思つたら、同じ音が立て続けに四回ほど聞こえる。

気になつた俺はバックミラーで後ろの様子を確認すると、荷台にいる部長の背中しか見えない。サイドミラーを見ると、追跡してい

た車の姿が見えなかつた。

疑問に思つてゐると、部長が助手席のドアを開けて入つてくる。

「さて、邪魔者は消えたわ。目的地までGOー！」

「俺が運転するんですか……」

その後は、先程みたいな追つ手も現れる事無く。部長の指示通り車を走らせる。少し前から山道に入りガタガタ振動が凄い。

「あ、そこ右行くとすぐに目的地ね」

言われた通りに右に曲がると、すぐに田の前に一軒の小屋が見えてくる。丸太で出来た小屋で、小屋というよりは軽井沢にあるような別荘だった。築何年も経つていいか新築みたいに綺麗だ。

車を停めて、荷物を持ち小屋の中に入る。

「ここが、河原特捜情報部の学校外部室ね」

玄関の向こにはすぐに広々とした空間があり、玄関の脇には一階へ続く階段がある。部屋の中には木材の心地よい匂い。何か落ち着くな。

小型の自家発電機もあり、テレビも冷蔵庫も洗濯機もお風呂も完備されているここは、どうからどう見ても別荘にしか見えない。

第3公演「軽トラ君の爆走」（後書き）

主演／冬羽刹雪／名月院加奈

出演／黒塗りの車の運転手／電車のお客

スペシャルサンクス／軽トラ君名月院仕様スペシャル

第4公演「モンキー君の逃走及び反撃」

なるほど確かにこれだけの設備が整っているアジトがあればテン
トなんか必要ないな。

それにしても、部長は一体どんな人生を送つて来たのだろうか。
こんな高級そうな別荘もとい部室を所有しているのだから当然の
疑問だらう。

無免許なのに車の運転も出来ることにも驚きだ。しかもマニユア
ル。

「トイレはそこで、その隣がお風呂。寝室はトイレの隣のドア。二
階はなにもないただの大部屋。

あ、でも滑り台があるから遊んでいいよ」

荷物の中からスーパーの袋を取り出して、それを冷蔵庫に入れな
がら説明する部長。

生肉とかもあるようだけど、鮮度は大丈夫なのかな。

「わたしのバック、クーラーボックスと同じだから大丈夫」

そう言ってバックを持ち上げる。

部長愛用のバックは肩に掛けるショルダーバックで、とても年頃
の女の子が使うようなものではない。

大体部長は服装とかに気を使わない。部長が来てる服なんて制
服しか見た事ないしな。

荷物を二階に置いて置こうと思い、階段を上る。

階段を上がりきると、すぐに十畳ほどの広間だった。

「せつせつ
。滑り台使つて早く降りてきて」

言われた通りに滑り台を滑る。ちょっと楽しい。といふか部長。
その呼び名で呼んだら次は退部しますよ。

「何ですか？」

「ブリーフィング。ブリーフィング」

ブリーフィング？ ああ、いわゆる作戦会議のことか。

部長はテーブルに地図みたいな物を広げる。その地図は、左上が赤く塗り潰されている。

「そこは開拓地。つまり探索済み。今日はこの辺かな」

言いながら青ペンで印しを付ける。

「という訳で、はい」

無線とスタンガン。それに黒くて物騒な代物。ハンドガンを手渡してくれる。

「はい？」

「わたしはここで、指示を出すから」

地図を広げないもう一つのテーブルを指差す。そのテーブルには四台のパソコンが鎮座している。

どうやらこの山の至る所にカメラが設置されていて、リアルタイムの映像が見れるらしい。

そんなことして良いのだろうか。一応この山の所有権は……あれ

？ 誰にあるんだろう国かな。

「部長一人で、カメラ設置したんですか？」

「蟹渡かにわたりとその部下が手伝ってくれた」

かにわたり。どんな字を当てるのだろうか。蟹渡かな。その人と部長はどういった関係なんだ。

「作戦開始！」

俺の心境など知る由もない部長が作戦の開始を宣言するが、

「あの……まさか歩いてこの山の中を探索するんですか？」

不安を感じながら俺が言うと、部長はまた呆れたような顔を作る。

「この日の為に一ヶ月も前から体力を養つて来たでしょう」

助つ人作戦にはそんな目的があつたとは初耳だ。しかし、いくら鍛えていても山の中を歩き回るのは。

「仕方ないなあ。確かに裏側にモンキー君名月院スペシャル四号機があつたと思うよ」

「裏側ですか？」

玄関から外に出て裏側に回ると、一台のバイクが停めてあつた。

小さめのそのバイクはモンキーと言つ。

渡された鍵を差し込みエンジンをかける。

実はバイクは前世でも趣味で乗つていたのでエンジンをかけただけで、かなりチーンされていることが分かる。

「道の案内のわたしがするから。熊とかには気をつけて」

「了解しました」

無線機のヘッドフォンを耳に当て、モンキーのアクセルを開ける。もし熊に遭遇した時は頬むぞモンキー君。

ブオー。返事の代わりに排気音が響く

モンキー君を走らせながら辺りを耳に見回す。見事に木しか見えない。

気分は森林浴だな。

平和だなあ。小鳥の囀りなんか聞こえるし。本当にJUMAなんかいるのかな。

「冬羽隊員。応答せよ、応答せよ」

すっかり軍隊みたいだな、無線と言えば応答せよか。

「なんでしょうか？」

「奴らが来たみたい」

「はつ？ 奴ら？」

部長から説明される前に奴らと呼ばれている者が姿を現す。奴らは先程の黒塗り車に乗つっていた。正確にはベンツだが。

「あれが奴らですか」

「とにかく逃げて！」

逃げてといわれても、もうすぐ側まで来たんですけど。

ベンツが俺がモンキーを停めている隣に停まる。窓ガラスが開き、若い男が顔を出す。

「ツーリングかい？」

やる気のなさそうな声が飛んでくる。俺は首を縦に振つて肯定した。

「そうかい。とにかくこんな女の子を見かけなかつたですかい」

と言いながら部長が写っている写真を見せてくる。

今度は首を横に振つて否定した。

「そうかい。じゃあ、」

写真を胸ポケットにしまい込み、その代わりに銃を取り出す。

「あの世でも達者でな。名もない少年」

「へつ？」

躊躇いもなく放たれた銃弾は俺が居た位置を通過する。
とつさにモンキーのアクセルを全開で開け、加速したので事無きを得た。

「何！？ あの人一体何！？ 僕を殺す気！？」

「落ち着いて。わたしが言う通りにモンキー君を走らせて
すぐ背後にはベンツが迫つてくるわ、運転している男が片腕を窓
の外に出して発砲してくるわで生きた心地がまるでしない。

「ん？ 弹切れか。仕方ねえ轢き殺すか

「何物騒なこと言つてるんだよー 轢き殺すつてなに！？」

「ベンツであんたを撥ねることさ」

「身も蓋も無いな。おい

「次右に曲がつて！」

部長の仕方指示通り、ドリフトみたいに車体を右に曲げる。
「すぐにターンして、ベンツの横を通つて」

「ええつ！？」

「大丈夫、信じて。作戦は……」

「了解しました！」

モンキーのアクセルを全開で開け、前輪を上げながら加速する。
充分な加速がつくと、モンキーをターンさせ、ベンツに向かって
いく。

「さあ！ 命ごいをしろ！.. しても助けてやれねえがな！..

「それは……あんたの方だ！」

「撃て！」

片手でハンドガンを構え、運転席のフロントガラスに向かって三

発を続けて撃つ。

弾が着弾するがフロントガラスは割れないことがない。その代わりにペンキがガラスに付着する。

「なに！？ 前が、前があああああああーー！」

ペイント弾の効果は抜群だ。俺は難無くベンツの横を通り、モンキー君を停めてベンツの行く末を見た。

直進するベンツ。部長が何かのカウントダウンを始め、

「ゼロ」

部長の声と共に車が大爆発を起こす。粉々に吹き飛び、タイヤの残骸が目の前まで転がってくる。

「……」

「さて、邪魔者は消えたし、探索を続けましょー」
いや、消えた。というよりかは消したというべきなんじゃないだろうか。とは思ったものの心の中にそつとします。

自己防衛になるのかな、これつて。

第5公演「部屋×部長=要塞」

多少の邪魔が入つたが一日の探索を終了し部屋へと戻る。時計をしていないのでよく分からぬが、日が落ちて来たので多分六時頃だろうか。

「ただいま戻りました」

「おかげり。夕ご飯作ってるから、少し待つて」
先にお風呂にでも入つてとの部長の言葉に甘え浴室へと移動する。

シャワーを浴びてから、湯舟の中へとダイブしのんびりする。
朝早くの移動に加え、突然のカーチェイス。初めて命の危機に直面し目の前でベンツ爆発。

そんなあまりにも突然であまりにもありえない事態が続いたので、氣にも留めなかつたが。この状況つてやばいんじゃないだろうか。

今更なにいつてやがんだつて感じだがこんな周囲に民家もない山の中。一組の男女が一つ屋根の下で過ごすなんてシチュエーションは想像もとい妄想の中でしか浮かばないが。そんな事態に俺は直面している。

部長は何も思わないのだろうか？ それとも初めて新入部員が入つたのが嬉しくてガードが低くなつているのか。

湯舟の中で考え込んでいると、突然浴室のドアが開き、エプロン姿の部長が出現する。

「……」

「ご飯出来たよ。早く来て」

ガラガラピシャとドアが閉まり一人湯舟に取り残される。
「いやん」

すまん。めちゃくちや気持ち悪かつたな。

浴室から出た俺は、Tシャツにハーフパンツというラフな恰好に着替える。先程まで来ていた服は洗濯機にぶち込んで置いた。

それにしても、こここの汚水は何処にいくのや。ちゃんと整備されてるのか。

不意に第九が流れ始める。携帯を取り出すとメールが来ていた。

「なんで今日部活来なかつたんだよ？」

川吉か。嘘のメールで適当にこじまかしておくとするか。

メールの返事を書きながらビングに移動し、椅子に座ると同時に送信しテーブルに携帯を置く。

「メール？」

「ええ、サッカー部の友達で」

「電波入つた？」

「入つてますよ」

携帯のディスプレイを部長に向け、アンテナを確認させる。

「いいな。わたしの携帯ここだと電波入らないから。その会社の携帯に変えようかな？」

「あまり使つてる人いね、この携帯」

「学生ではあまり見ないね」

俺の携帯に一瞥してから、部長は笑顔を作り、テーブルに並んでいる料理に視線を送る。

「冷める前に食べよう」

「いただきます」

山に来たらカレーしか思い浮かばないと言つても過言ではない。その例に漏れず、部長もカレーを作つた。見た目は完璧なまでに美味しそうなカレーを一口食べる。

「……」

「どうかした？ 顔真っ青だけど」

「……ぎいやああああああああ……」

想像を絶する辛さに即座に水道に駆け寄り、全開で蛇口を開く。

「だ、大丈夫！？」

「『ばばざばば……』ばばざさばぶは」

大丈夫です。と言つていふつもりだが、水道水を口に流し込んで

いるので、人外の言葉になつてしまつ。

部長は部長で心配そうに背中をさすってくれているが、あまり効果が得られていない。よつやく、舌の痛みが治まり、ゆっくり蛇口を閉める。

「……辛かった？」

不安そうに聞いてくる部長に出来る限りの笑顔を作り、答える。
「すみません。事前に言つおけば良かったですね。実は僕、辛いものが苦手で……」

もちろん嘘だ。苦手な所が好きなのだが、そのことは伏せておこう。

「じゃあ、何か変わりに作るから、待つて」

「大丈夫ですよ。水さえあれば、食べれます」

それでも、他のものを作ると言い張る部長を宥めて、根性と気合いでカレーを完食する。

完食後部長が皿を洗い終わり、シャワーを浴びに行き、「……」

俺はソファーに横になり天井を見つめていた。

近くのテレビからは、お笑い芸人のコントが流れている。
時計に目をやると八時五十九分。後少しで九時か。

「まことに、もうすぐ九時だ」

浴室から戻ってきたのか部長が、慌ただしくテレビのリモコンを取ると、チャンネルを回し始める。

今日の洋画劇場を見たいらしく、チャンネルを探している。

俺も毎週見ているので、今日は何だと考えながらテレビを見る。

「むおお……」

テレビの近くにいた部長の姿が嫌でも視界に入った。

風呂上がりで、まだ髪が濡れている部長はバスローブ姿で正直、純粋な中学生には刺激が強い。おまえ、本当は二十歳だらうつていうツッコミはいらん。

向かい側のソファーに座る部長の姿を凝視している自分に気付き、

慌てて天井に顔を向ける。起きていると、理性を抑える事が果てしなく難しいのでさつさと寝ることにしよう。

幸いにも朝早かつたので睡魔は早く訪れた。

次に目を開けた時には部長の姿は無く、部屋も暗かつた。今は洋画が終わった後の時間か。

寝室で寝ている部長を起こさないように物音を立てないように、冷蔵庫まで移動する。冷蔵庫の中にあつたペットボトルコーラをコップに注ぎ、コーラを冷蔵庫に戻す。

「ふう……」

渴いたノドに冷たい炭酸の刺激が心地よい。もう一口で飲み干せるな。

「コップに口をつけた瞬間、窓の外に閃光が走った。それに次ぐよう」に大爆発音が響き渡る。

「ぶつ！？」

飲みかけたコーラを噴出し、変な器官にコーラが侵入する。

「ゲホッゲホッ。な、何が！？」

窓の外が異様に明るい。恐らくサーチライトだろう。どうやらただ事ではない事態が起きていたようだな。窓には近付かない方がいいか。

「この音……銃声？」

映画とかで聞いた事がある。恐らくこれはサブマシンガンの音だ。あまりにも理解しがたい現実に放り込まれてしまい、部長の事をすっかり忘れていた。

「部長は？」

寝室のドアを開けながら叫ぶ。寝室には部長の姿は無かつた。ベットが少し乱れてるのでつい先程までいたのは間違いないようだ。

「何處に……」

ベットの前で呆然としている俺の口を突然何者かの手が塞ぐ。

「ぐつ！」

「静かに」

聞き慣れた声。その声を聞いた途端、腰が抜けそつなくらい安堵する。

口元が開放され、後ろを振り返る。そこには制服姿で右腕に河原特捜情報部と書かれた腕章をつけている部長がいた。

「部長？」

「敵襲よ。はい、これ」

片手にスナイパーライフルを持つていてる部長に防弾チョッキを渡される。物騒極まりないな。それに敵襲だつて？ なんか怨まれるようなことしたかな。

「現在。警備システムと地雷により何とか防衛線を維持している。けど、長くは持たない。そこで冬羽隊員の出番」

「僕に何をしようと……」

「倉庫に行って」

というわけで銃弾が飛び交う外に飛び出した訳だが、速攻で後悔した。

怖すぎる。サーチライトの光りで辺りは有り得ないほど明るかつたし、小屋の周囲には何時の間にか、地面からサブマシンガンが飛び出でていて、動く者全てに発砲しててるし、地雷がそこら中で爆発してるし。訳が分からない。

「よつ。また会つたな」

「あ、どうも生きていたんですか。爆発しましたよね？」

昼間にベンツで俺を殺そうとした若い男が目の前に現れる。

不思議なことに怪我一つしてない。

「地雷を踏んでも何故か生きているんだ。あちらこちらで爆発してるが、死人はいないぜい」

「敵襲つてあんたらですか。部長を狙つ悪の組織？ それともＵＭ

Ａ保護団体の方ですか」

男はタバコに火をつけながら答える。

「勘違いしちゃいけねえぜ？ 僕達の目的はお前一人だ。ねえ蟹渡さん？」

暗闇の中からタバコを吸つている男よりかは年上の男が出現する。身長が百九十以上はある大男で、恐持ての男を目の前にした僕は息を飲む。

「よう。お前が冬羽刹雪だな」

「だつたら、どうするんだ？」

空手を学んでおいて良かつた。前世で警察官になる為にだが。こんなに頼もしいことはない。

「どうするか……だと？ 「ふん。決まつている」

来る。とつさに身構えると、

「我らが愛しい加奈お嬢様をたぶらかした、貴様に神の鉄槌を降すまでよ！…」

……はい？ 加奈お嬢様？ 誰ですかそれ。

「とほけるつもりか！？ 貴様が新入部員を装い、加奈お嬢様に近付いたことはもう調べがついているぞ！…」

加奈お嬢様つてもしかして部長のことか？ つてか、あんたと部長はどんな関係だ蟹野郎。

「いいだろう！… 教えてやろつ！ 僕こそは加奈お嬢様が幼少の頃からお仕えしている、蟹渡圭吾かにわたりけいごだ！…」

あんた、まさかストーカーか。部長も大変だなこんな変質者にまわりつかれて。

「ちがあああう！… 僕の使命は加奈お嬢様の……」

よくわかりました。変質者野郎。

「違うと言つてるだろうが！… 原田も何か言つてやれ！ 僕達の事を変質者扱いしてゐるぞ」

「いや、変質者扱いされてるの間違いなく、蟹渡さんだけですぜ。てか、実はみんな思つてますぜ、この間なんか加奈お嬢さんの下着盗もうとしてあんた加奈お嬢さんに見つかりやがったしな」

「なつ！… 違う。違うぞ、あればだな……」

なんか知らんが仲間割れ始めた一人の横を通りて物置のドアを開ける。中にはかなりの数の銃火器が揃えられている。何を使うとするかな。

目を奪われたのはRPG……口ケットランチャー通称口ケランだ。口ケランを持ち上げると後ろを振り返り、変質者に向かつて構える。

「おい」

声をかけると、二人同時に振り返り、

「ななな、何をしている！？ 貴様には神の鉄槌を……」

蟹渡もとい変質者野郎は明らかにうろたえているのに対し、原田という若い男は変わらず、タバコを更かしている。

そういえば、原田に昼間殺されそうになつたんだつた。

変質者野郎に殺人鬼。正義の鉄槌をうけるべきなのは間違いなく、「てめえらのほうだろうがあああ！――

ド派手な爆発後に残つたのは、焦げた変質者野郎だけだった。原田は何処に行つた。

「ま、いつか

静かになつた事だし寝るとしようかね。

第5公演「部屋×部長=異端」（後書き）

主演／名月院加奈／冬羽刹雪

出演／蟹渡／原田

友情出演／エキストラの皆さん

第6公演「地上軍零式級管理区域」

小屋もとじ部屋に戻つた俺を部長の笑顔と手料理が迎えてくれる。いつもまでのドタバタは何処へやら、全く平和的な朝が訪れる。

「今日はJMAを見つけよつ

「そういえば、俺と部長はJMA探索の為に来たんだつけか。あまりにも非日常的な事が立て続けに起きていたので、忘れていた。

「俺は許しませんぞ！ そんな男と一人きりなんてことは断じて許しませんぞ！！」

ロケランの直撃喰らつた割には復活が早いな。

「原田さんは牛乳とオレンジジュースのどちらが良いですか？」

「オレンジジュースがいいですね」

流した。明らかに部長蟹渡さんの事を無視してゐよ。何やらかしたのかは知らないが、嫌われすぎじゃないのか？ 蟹渡さんの前にだけパンじやなくて柿の種一個しか置かれていないし。

「いや、すみません。俺は牛乳で」

「そういえば、冬羽は、原田さんとは初対面だよね」

「いえ……もう会つてるつて言つたが、なんといつか」

昨日殺されかけました。とでもいうべきだろうか。いや、それよりもコップ片手に硬直したままの蟹渡さんの姿が見るに堪えない。本当に何をやらかしたのだが、普段は温厚な部長がここまで露骨に避けるとはね。

重苦しい空気が流れる。部長が間を持たず為に原田さんの紹介などをすりが焼石に水状態だ。

しかし、今の部長の説明には驚くべき部分もあった。正直原田の事なんかどうでもいいが、

「それじゃ、部長はあの名月院グループの直系なんですか？」

「今の会長のお孫さんでさ」

名円院グループと言えば日本で最も資産が多いといわれている。その流れは旧財閥時代から受け継がれ、現在の多角経営の基盤を作つたとか。

皿洗いをしている後ろ姿からは想像も出来やしない。そりや確かに、少しづれている部分もあつたさ。しかし、普通の市立中学にそんな家柄の人がいるなんて考えない訳で。

そういうば、どうして河原市なんて田舎に住んでいるのだろうか。もつと都会とか。

「さあな。それは俺にも分からん。加奈お嬢様は御家族の方々と離れ、お一人であんな田舎で暮らしている」

急に会話に混ざつて来た蟹渡さんをうざがく感じながらも、もたらされた情報について考える。一人で暮らしていることは、蟹渡さんと原田さんは普段どうしてるんだ。

「普段は俺達は一般の社員として過ごしているわけだ。今回は休暇を利用して、お嬢さんの様子を見に来ただけでさ」

「まあそういうことだ」

「そういうことだ。じゃねえよ。だとしたらあの部隊は何だつたんだよ。もひ、特殊部隊ばりの装備してたぞ。まさかあれも社員とかいうなよ。

「ごめこせつだ。あの部隊はサバイバルゲームがお好きな加奈お嬢様の為に社員が結成した部隊である」

どちら辺にツッコミ入れればいいのか誰か教えてくれ。てか、ただの一般社員の癖して、何でそんなに部長のことについて詳しいんだ。

「社員と言つても、俺と原田の家系は名円院に代々仕えていた。家臣の家系。無論今ではそんな主従関係は無く。家族のように接してもらつている」

ややこしい関係だな。つまりは蟹渡さんと原田さんはコネだけで本社ビルの社員として採用され、あまつさえ部長のストーカー行為に及んでこるということか。

「だから、違うと言つてるだろ？」「

「それにしても、分からんのですが、どうして一人は部長にこだわっているんですか？」「

至極当然のことと思われる質問をしたと思つたのだが、蟹渡さんの表情が固くなつたのを見逃さなかつた。原田さんを見ても、同じくどこか固い表情のままタバコを吸つていた。

「「めんね。待たせちやつて」

「とんでもない。加奈お嬢様の為なら何年だろ？とお待ちします」ぱつと固い表情が崩れ、そこにあるのは先程までと同じ蟹渡さんのアホ面である。相も変わらず無視されているのにもげずに部長に纏わり付く。

「加奈お嬢さんの支度まで、まだ時間がある。あの馬鹿も時間を稼いでくれるみたいだし、先に外にでるぞ」

さつきまでの口調とは打つて変わつた原田さんと言われるがまことに外に出る。

外には昨日大破したはずのベンツが駐車してあり、地面からマシンガンが飛び出していない。

普通の景色がそこにあつた。

中学生の俺にタバコを薦めてくる原田さんは不良青年だが、それを受け取る俺も不良少年だな。一応受け取つただけで、吸いはしないがね。

「お前はどうしてお嬢さんの部活動に入つた？」

「どうして…… でしょうね」

「ふん」

「……」

不意に原田さんが話し始める。俺は黙つたまま遠くを見据え、原田さんはタバコを吸つ合間に、

「よくは分からんが、お前はそりらそんじょのガキとは違う感じがするからな。恐らくあの馬鹿も気付いているはずだ」タバコをくわえ、煙を吐き出し。

「いつかお前にも分かる時が来るはずだ。そん時に俺とあの馬鹿を失望させることだけはすんなよ。もしそうなつたら一発殴らせてもらひ」

結局今の俺には訳の分からぬ事しか聞けなかつたが、分かつたこともある。蟹渡さんと原田さんは部長が河原市に一人で暮らしている理由を知つていそうな気がする。

部長が俺を部員に選んだ理由。確か俺が河原小学校に通つていたときに、天才と呼ばれていたから。頭が良い。もしくは優秀な人材が欲しつたからか。

前世では始業式の日に部長が教室に来なかつた。それは俺が天才でもなければ、優秀でもなかつたせいか。

「僕。先にモンキーで探索行つてます」

「おい」

歩き出した俺の背中に声をかけられる。後ろを振り返ると、黒い四角の物体が飛んできた。

「無線機？ それに鍵」

「それねえと困るだろ」

「そうですよね」

うまく笑えたと思う。今度こそモンキー君に跨がりアクセルを開けて発進する。一応地図を確認しながら移動していいた訳だが、こつてどこだ。

迷子？ まさか生まれてこのかた迷子になつたことがない俺が。

「……迷子だな」

情けないが、部長に助けを求めるよりも無線機に入つて来るのはノイズばかり。本格的にまずい、山で遭難。六十年後に発見。なんてことになつたら俺がＵＭＡになつちまつよ。

どちらかと言えばＵＭＡか、確か戦争中に行方不明になつた人のこと。

「どうすつかな……」

「よいよ最悪のシナリオを目指しているような気がするな。

「うん？」

風で揺らいでいる草木の間から、何か看板らしき物が姿を見せて いる。もしかしたらこの辺の地図とか案内板かと思い近づくが、そ こに書かれていた文字はあまりにも関係が無いものだった。

「漢字……地上軍零式級管理区域？」

途端背筋に何かが走った。それは、俺の中の何か。そう。第六感 みたいなものだつたのかもしれないし、もしくはもつと純粹な防衛 本能だつたのかもしない。とにかくこの場から離れた方が、

俺の思考を中断して、それは視界に入ってきた。看板の後ろには 金網の柵がありその向こう側には、地下施設への入り口と思われる 扉があつた。コンクリートの壁に真中辺りに、扉が斜めに掘られて いるように作られている。

過去に作動していたであろう警備システムはすっかりその機能を 停止して、その役目を放棄していた。俺は金網に手を掛けると、よ じ登つて向こう側に降りる。

危ない行くな。と、止めている俺と。何があるか見てみよう。と、 背中を押している俺がいた。止めている俺は、命の尊さについて語 り、背中を押している俺は人の好奇心について語っている。

扉の前に立つと、唾を飲み込んだ。

見た限りでは南京錠みたいな鍵は取り付けられていない。内鍵だ ろう。

「……」

ドアノブに手を掛け、回した瞬間にドアに鍵が掛かっていないこ とに気がついた。どうする行くか、引き返すか。

二人の俺は今でも討論を行つており、圧倒的不利な状況にいる保 守派の俺が熱くなり語り。推進派の俺は勝利を確信し余裕そうに涼 しい顔をしている。

どうする。行くか、行かないか。

保守派の俺が叫ぶ。行つてどうする、UMAを見つけたいのは部 長であつてお前は別に探したいともなんとも思つてないんだろ、情

報部にだつて結局の所は下心丸出しで入つたに過ぎないだろ。

ふん。確かにその通りだ。そこは否定しないさだつたら一人が納

得出来る方法を取つてやるよ。

この場所を部長に教える。そんでもつて部長と一緒に探索する。俺だつてここが何なのか知りたいからな。好奇心旺盛なのは昔からだ。

ドアノブを離し身を翻すと金網に手を掛けよじ登る。停めてあつたモンキーに跨がる。どうにか部屋まで戻れば良いんだけどな、ま、なんとかなるか。

第7公演「忘却は使用用法を護つて正しくお使い下さい」

快調にモンキー君を走らせてはいるものの、目的地に快調に近付いているかとはまた別問題だった。無線機には先程からノイズしか入ってこない。ここがどの辺かも分からぬ。ふと俺はモンキー君を停めて辺りを見回す。この山のそこかしこにカメラが設置されているのなら、この場で留まり何か信号を送った方がいいかもしけないな。

SOSと身体全体を使い表現しているのだが、なんか死のダンスを踊っているような気がする。子供が見たらきっと泣くぞ。その奇怪な行動ぶりにな。しかし、こちとら死ぬか生きるかの瀬戸際なんだ、なりふり構つていられるか。

死の舞踏を俺が道の真中で踊っているよ、道の向こう側から一台の車が走つてくるのが見えた。渡に船とはまさにこの事だろ。何とか止まって貰うために今度は車に向かつて死の舞踏を披露する。その願いが通じたのか、青い見た事ない車種の車は止まつてくれる。

「どうしたの？」道の真中でSOSの踊りなんかして

ゆつたりとした口調。大学生くらいの大人びた女性が窓から顔を出して尋ねてくる。まさか俺の死の舞踏が通じるとは。

「実は道に迷つてしまいまして、困つていたんですよ」

「ありやりや？ ジャあ君が冬羽刹雪君？」

以前どこかでお会いした事がありましたか？ 実に申し訳ないのですが、僕には初対面に思えるのですが。

目の前の女性は微笑んだ。その微笑みは思わず見とれてしまいそうなほどの色気と可愛さがあった。

「はい。冬羽刹雪君。とある人から託された手紙です」

「手紙？ 僕にですか」

「ええ。今日この時間に道の真中で死の舞踏を踊つている少年に渡

してくれって頼まれました

多少訝しいと思いながら渡された封筒を見る。別にそこら辺で売っている茶色い普通の封筒だった。少し年代が古いのか色褪せてはいるが。誰からの手紙なんだ。今日この時間に死の舞踏を踊つている少年だつて？ まるで俺がここに居るのが分かつてていたとも言いたいのか。

「確かに渡したよ。じゃあねまた会いましょう」

「あ、あの。あなたは……？」

目の前にはもう何も無かつた。あるのは草木と土の道。左右を見ても、あの青い車が走つてはいなかつた。夢でも見ていたのか。だが、渡された封筒は確かに俺の右手の中にある。その封筒だけが、現実だつた事を証明してくれている。

モンキーの近くに腰を降ろし封筒の中身を取り出す。

中に入つていたのは何枚かのルーズリーフだつた。そのルーズリーフには現在地から部室に戻るまでの詳細な道乗りが記されている。そして、最後の紙の最後の一文を見た時。俺は声を上げようとした。しかし声帯は俺の意思とは裏腹に、ひゅうひゅうと空氣しか出さない。

ルーズリーフの最後の一文はこうだつた。

『地上軍零式級管理区域には近付くな』

誰だ。この手紙を書いたのは一体誰なんだ。どうしてその名称を知つてゐる。どうして、俺がここに居る事を知つていて。部長か。これは部長なりの笑えない冗談ではないのか。いや、しかし俺があの看板を見つけたのは偶然だし、一人で探索に来たのも気まぐれだ。いくら部長でも前から仕込めるはずがない。

UMA出没疑惑に謎の施設。突然現れた青い車に乗つていた女人。謎の言葉を残して音も無く一瞬で目の前から消え、極めつけはこの誰からか分からぬ差出人不明の手紙。

一体何なんだよ。気が変になりそうだ。落ち着けこんな時こそ冷静になるべきだ。

今までだつてタイムスリップなんて常人では理解しがたい現象もすんなり受け入れただろう。それに比べればこれくらいどうつて事がないはずだらう。

「ふう……」

とにかく今は部室に戻ろう。一人は嫌だ。誰か人に、部長に会いたい。

部長に会つたら、何とか説得してこの山から出よう。ここには何か得体の知れない物を感じる。ここにこれ以上いると危険だ。持てる限りのテクニックを駆使して、何を基準にしたかは知らないうが、タイムレコードを大幅に更新して部室へと戻つてくる。すぐさまモンキーから飛び降りて部室のドアを乱暴に開ける。部長。ここに、いますよね。

リビングには部長の姿が無い。一階に駆け上がり確認するがいない。滑り台で一階まで降りて寝室を確認するがやっぱり居ない。最後に残つたのは浴室。

もう少し慎重になるべきだつたと思う。浴室ならドア越しに声を掛けて中に部長が居るかどうか確認すればよかつたのだけど、その時の俺はそんなこと考えもしなかつたと言うか、いや、考えたんだけど。なんというか見えない力が作用したように浴室へと続くドアを勢い良く開けた。

「ぶちよ……う

「……い

お決まり。と言えばそれまでなんだろうけどね。ドアを開けた目の前には風呂から上がつたばかりだらう。まだ濡れている身体をタオルで拭いていた部長の姿があつた。うん、もちろんつて、そこまで俺に言わせるつもりか。まあ、つまりだこの場に警察官がいたら即現行犯逮捕で情状酌量の余地も無しだ。

「いやああああああ！！！変態！！！」

叫びながら、部長は近くに置いてあつた衣服の上かに鎮座してい四角くてゴツゴツした物体。ハンドガンを右手で掴み俺に向かっ

て構え、何のためらいもなしに引き金を引いた。パンツ。という乾いた音が聞こえたと思った次の瞬間。俺の意識は真っ暗闇に閉ざされてしまった。フロードアウト。

次に目を開けると目の前には部長の今にも泣き出しそうな顔。涙目になりながら、俺を覗き込んでいる。こんな時に言つ合ひ詞じやないだらうけど。不謹慎だらうけど、泣きそうな部長も可憐にな。

「気がついた？ 痛いところは、気分は悪くない？」

次々と質問を投げかけてくる部長に笑いながら答えて、安心させる。どうやら俺は部長の携帯ハンドガンに頭でも撃ち抜かれて、倒れたる時にしこたま後頭部でも打つたのだろう。少し後頭部が痛んだが、そんなに言つ程じゃない。

「何か食べる物持つて来るね」

そういうえば、確かに少し腹が減つたな。窓の外が暗いってことは俺はどれくらい気絶していたのだろうか。全く自分の事なのが情けない。

身体を起こした時に気づいたが、どうやら俺は部長専用のベットを奪い取つてしまつたようだ。やはり女の子らしい可愛らしいものがベットの周りにこれでもかと言つほど陣取つているが、少し手を伸ばせば、それと同じくらい物騒な物が転がつてゐる。ハンドガンにスナイパーライフル。マシンガンに手榴弾、つて手榴弾？ いくら何でもやばすぎるぞ。

昨日調べたあの小屋にはロケットランチャーもあつたしな、ステインガー対空ミサイルも存在していたぞ。

部長の趣味がサバイバルゲームと言う事だけ、どちらかと言えば無類のガンマニアなんぢやないだらうか。というか、どうやって色々な銃を集めているのだろうか。気になる所だ。

「山つて言つと、カレーしか思いつかなくて。昨日よりは甘めの力

レーだけど、いいかな？」

「カレー好きですから、大丈夫ですよ」

「Jの山に来てから二度目のカレーは本当に甘かった。」

「もう休みましょうか」

「あ、じゃあ俺がソファで……」

「いいから、そのベットで休んでいて。あ、でも」

部長は銃だけは全て回収してリビングへと戻つていった。薄暗くなつた部屋でぼんやりと天井を見つめる。何か忘れているような気がするけど、何だったかな。何気なく壁に視線を移すとカレンダーが掛けられていた。暗くて、文字までは読めないが。

「カレンダー……？」

そこで思い至つた。さつきから気になつていてる疑問の正体が。それはつまり俺が意識を失つてから何時間が経過した。それとも何日か。そのどちらでもいいが、俺の疑問はただ一つ。今日は何日かつてことだ。そろそろゴールデンウイークも終わる頃だと思うが。

学校の登校日について不安に思つていると、窓からサーチライトが入り込んでくる。またなのか？ また戦場になるのかここは！？

急いで身体を起こしてベットから抜け出し、窓から外の様子を伺う。外には人影は見えない。不審に思つていると近所迷惑完全無視の爆音を立ててそれは現れた。

「ヘリコプター？ あんなものまで」

「夜中にごめんね。お迎えが到着したから帰ろつか」

「あれが迎えですか？」

視線をヘリに固定したまま言つ。

「空飛ぶのは初めて？」 前世で一度だけ飛行機に乗つた事はあるが、ヘリに乗るのは初めてだ。

まとめられた荷物を受け取り、外に出る。途端ヘリのローターが吹き飛ばしてよこす土煙に顔をしかめるが、部長が出てきたことにより、ヘリのローターの回転が遅くなつて行く。そう、あくまで俺ではなく部長が姿を見せたからだ。

ヘリに乗り込むと、操縦席の一人が仇を見るような目付きで睨んでくる。一応笑ってはみたが、恐らく苦笑だと思つ。

やがてヘリは空中に飛び立ち、世界が大きく傾きながら地面が遠のいていく。

U M Aを捜しに来たのに、ベンツに追われ。夜は襲撃を受けたとんでもない山が遠のき、もう見えなくなつていた。

第7公演「忘却は使用用法を護つて止じくお使い下せ」（後書き）

ところが、瑞山冬人です。作者です。ヘタレです。はい最後の
どうでも良いですね。この度はこの作品をお読み下さりありがとうございます。
ジャンルはコメディーと銘打った訳なのですが、あまりにも笑うところが少ない。ってゆうか無いじやんと友人から「指
摘を受けましたとおり。笑うところがあまりないわけでございます
が、これからはギャグ路線を突っ走りでいきたいと思いますが。どうか暖かい目で見守って下さい。次回はJMAをろくに探索してい
ない編を終了しまして学校が始まります。一年の季節はまだ始まつ
たばかりでございます。

第8公演「授業中は静かにしないとハゲ校長に呼び出される運命」

「ゴールデンウイークも平和的にはたまた活動的に終わりを告げ、休み明けのだらけきつた奴らを淘汰する為と言つても過言ではないイベントが存在する。それは何かというとだな」

「中間テストの範囲だけど……」

「そう中間テストである。」

「教科は？」

「数学」

「確か - + とかだろ」

「いや、お前らの会話は間違つてゐる」

横槍を入れられた俺と金木はさも迷惑そうな目付きで数学の教科書から視線を呆れたようなアホ面を下げてゐる川吉の方を向く。

中学生が目前まで迫つた中間テストについて、討論をすることについて何が間違つてゐるというのか。その理由を正しく五文字以内、三十字以上で答えてくれ。

「中間の前に取り組むべき行事は体育祭だろ?」

「そんなん確かに存在したな。めんどくせ~」

「体育祭つて今週の土日だよね」

川吉。俺。金木の順に体育祭の意見を述べる。そう河原中学体育祭は土日が潰され執り行われる。そして振替休日は一日分だけである。この点も忌ま忌ましい。かくなる上は教頭もハゲにしてやりたいくらいだ。

「こあら!! そこの馬鹿三人衆!! 一人は天才だけど、馬鹿に數えられる三人衆!! 練習をサボルな!!」

随分と酷い物言いだと突つ込んでみると、途端に回し蹴りが飛んでくる。全く部長とは別な意味で危ないことこの上ない。

「体育祭に向けてやる気を出すのも結構だがな、中間テストを笑う奴は中間テストに泣くぞ」

「屁理屈述べるなあ！」

俺がこの世の真理を述べてやつているのににも関わらず無駄のない動作から右ストレートを繰り出していく。

「何で、おれ！？」

上履きの靴紐がほどけていたので直そつと屈んだ瞬間に右ストレートが俺の上を通過していく、川吉の顔面を捉える。『苦労様なことだ。

被害を被った川吉だが、反論も出来ずにいた。武道派で知られている、だいもんじなか大門寺捺夏に男で逆らえる者は一部例外を除いては存在しない。

「さ、早く金木君も着替えて。川吉は着替え終わってるんだつたら、さつさと練習に行きなさい。あとは……」

捺夏がその黒い瞳で睨んでくる。俺は肩をすくめる仕種をして、立ち上がる。

「何よ今日は随分素直じゃない

「授業も無いからな」

今日から体育祭に向けて練習しようぜ。つてのがこの学校における唯一の常識なので、一切授業がない。俺からしてみれば授業がないほうが常識外れのような気がしてならないんだがな。それにしても捺夏。誤解を招くような物言いは避けてもらいたいね。それだと俺達が普段から反抗しているようじゃないか。

「事実そうじゃない

悪ふれもなく言い放つ捺夏に対し俺は学ランを脱ぎながら反論する。

「言つておぐが、俺の反抗期は遠い昔に終わりを告げている

「その割には反抗的じゃない

あんな、日頃からのお前の要求を断るのは至極当然の事だと思うがね。大体お前は初対面の時から爆弾発言の連續だつただろうが。こいつとの関係を説明するには一ヶ月前。俺がこの学校に入学して間もない頃まで遡らなくてはいけない。

「すなわち。人が夢を見る行為は、記憶の整理を行つてゐる……」

国語の授業中教科書の内容を感情表現をせずに作文よろしく棒読みしていた訳だが、それが約一名にはどうも気にくわなかつたらしく、授業中だというのに、椅子を蹴飛ばすように立ち上がつた馬鹿が一人いた。ショートカットがよく似合つてゐる女子生徒が、俺を睨んでくる。

「ちがう！ 全然違う！！ もつとこう親友と戦うようなつもりで！」

空気が死んだ。俺を含む全ての奴らが、奇怪な人間を目撃したと言わんばかりの視線を送る。さすがにこの事態には国語教師の中本も呆然としている。

「……はい？」

「違う！！ そこは、あんたは一体…………!? とか言いなさいよ」

「何だよそれ！？」

「せつかく声が一緒なんだから、もう少ししらしくしなさい……」

そのキチガイキテレツ女が言うには、絶賛放送中の国民的アニメの主人公……だつたが最近では諸悪の手先にジョブチエンジしたキヤラと声が似てゐるので喋り方からなにもかもをそいつに似せるというのだ。

「……お前、馬鹿だろ」

「つこの馬鹿野郎はあんただあああ……」

掃除用具のモップ一本を両手に持ち、自分の机に乗り、一気に跳躍。上段から体重加算させて一気に振り下ろしてくる。

「あッピンク……」

スパン！ と爽快な音を立ててモップは俺の頭に直撃。その

瞬間にチャイムが鳴り響いた。

「あ、ああ……授業を終わります」

ろくに挨拶もしないまま中本は逃げるよう教室を出していく。未だに教室中は授業中のように静まり返り、たった一人の人間に惜しみもなく視線を注いでいた。誰も助けてくれないのかな。

「わかった！？」

「すまん。全然聞いてなかつた」モツプが再び頭を直撃する。俺が痛さに頭を抱えていると頭上から声が飛んでくる。

「という訳で、あんたあたしと付き合になさい」

「どんな訳だよ！？ 普通にやだよお前となんかじゃあれだよ、毎日がデスカーニバルだよ！！」

三度俺の頭に振り下ろされるモツプ。周りに助けを求めて視線を送つてもみない振り、見てみぬ振りかよ。

「付き合いなさい！」

「僕には、もう心に決めた人が……」

四度振り下ろされるモツプの前に俺は折れた。そんな訳で一ヶ月後の今日に至るまでの俺の位置付けは、

「大門字の彼氏」

「大門字の手下」

「ザ・モツプ男」

「不幸な少年A」

「唯一大門字に反抗することが出来る生徒」

「ミスターM男」

などなど様々な評判が立てられている。不思議な事に部長の耳には届いていないようだが、それも時間の問題だろう。さて、何て言いい訳しよう。

「体育祭の練習に行くわよ！ タツタとするー」

「はいはい。分かつてありますよ」

俺の心配をよそに無理矢理練習へと連行する捺夏であった。

第8公演「授業中は静かにしないとハゲ校長に呼び出される運命」（後書き）

主演／大門　字捺夏／冬羽刹雪／出演／金木／川吉／中本　／脚本／
瑞山冬人

第9公演「正しい伝統は質が悪い？」

そんなこんなで体育祭の日がやつて來た。とにかく騎馬戦というものを存知だらうか。騎馬になつて相手のハチマキを奪つたら勝ちという競技だ。

無論この河原中学にも騎馬戦は存在している。いや、それしかないと言つても過言ではない。河原中学の体育祭といえば伝統的に一日間、ぶつ継けて行う騎馬戦みたいなものと認識されている。

騎馬戦みたいなものというからには当然騎馬戦では無い。ルールは四十八時間の間に一人でも多くのハチマキを奪取せよとの事だ。ハチマキの獲得数にクラスでの生きている奴らをプラスして一番得点の高いクラスが優勝である。

ちなみにこんな行事たりいからわざと捕まつて始めの方でリタイアを考える者はいない。後ろの席の川吉いわく。

「本気でやらなきゃフルボッコだもんな」

だそうだ。

全体での開会式を校庭で終えた俺達は教室に戻つて競技開始の合図まで作戦会議を行つてゐる。その中心となつてゐるのが捺夏だ。いつでも迷惑な奴だよ。

「別動隊、冬羽。以上。この隊で優勝目指すわよ！…」

「おお…！」

一致団結とは素晴らしいね。てかこの河原中学においていじめの噂は聞かない。みんな仲良しだからか、一学年に一人は捺夏のような正義の味方がいて、いじめでもしようもんなら、ボッコボコにされるからか。つてちょっと待て、危うく流すところだつたが。

「俺一人！？ 味方いないのかよ、つてか別動隊つて何！？」

「決まつてるじゃない、優勝候補の一角であるディアブロを葬りさる為の部隊よ」

そんな悪魔なんて呼ばれている奴を俺一人で倒せる訳ねえだろ。

しかも一体だれだよ、レスリング愛好会及びプロレス愛好会の奴ら
だったら絶対やらねえぞ。

「あんたなら、楽に勝てる相手よ」

ターゲットであるティアプロの写真を渡していく。俺はその写真
に目を通して一言。

「正気か？」

「情も情けも無用。さつさと行きなさい！」

やれやれ、どちらかと言えば逝きなさいの方が正しいんじやない
だろうか。不本意ながらも競技開始の放送が流れる前に移動を開始
する。上履きのまま外に出て、部室長屋の情報部が不法占拠してい
るドアを開ける。

中は俺が入った頃よりかは綺麗になっている。俺が雑務その他全
てを請け負い整理した結果だ。コタツは変わらず部屋の真中に鎮座
しているがな。部長は例によつてパソコンを操作する手を止めてド
アに一瞥する。

入つて来たのが俺と確認すると視線をパソコンのディスプレイに
戻しながら、

「どうしたの？ 部室に忘れ物？」

「いえ。なんかめんどくさくて逃げて来ました。部長はどうするん
ですか？ 今日の体育祭」

キーボードを打つ手を止めて時計を確認してから俺に視線を向け
てくれる。

「もうすぐ開始の時間だね。その時になつたら冬羽はどうす
る？ 下手な『まかしは通じないか。』

「部長のハチマキをもらいます」

「これ？」

右手を緩やかな動作で差し出してくる。まるで子供に手を差し延
べるように優しく。

部長の右手首にはハチマキがリボン結びで巻かれていた。

「そうです」

「いいよ？ ただし……」

言葉を中断するように放送が入り、ハゲ校長が競技開始を告げる。

「取れるものなら、ね」

「なんですね！？」

いたずらな笑みを部長が浮かべると同時に俺の目の前に鉄鋼子が出現する。この部室のどこにこんな艦を弔していたんだよ。

「捕獲完了」

「……てへ」

拝啓。大門字捺夏様。開始早々とつつかまりました。もはや僕にはどうすることも出来ませんが、どうか奮闘し優勝をその手に掴んで下さい。というか別に一年の時は優勝出来なくてもいいじゃないですか。別に言い訳している訳ではありますせが、まだ来年もあることだから、仕方ない。

諦めかけた俺だが、部長が出ていった部室で学校指定のハーフパンツからクラス用無線機を取り出す。まだ、手はあるかもしないな。

「こちらで零壱隊、作戦通り四組の奴らを撃破」

「よしよし！ R隊は丁零式隊と一緒に一組の奴らを、上級生に遭遇したら、最低限の交戦をしながら逃げて」

「了解！」

無線による状況報告によると七割方は作戦通りに事は進んでいる。まだあたし達の部隊に損害はない。問題はあの情報部部長だけど、冬羽が抑えたのか今の所姿を見せない。

ふん。いくら通信を傍受出来ても、このあたしが考えたコールサインから特定の部隊を割り出すことは出来ないだろう。

「捺夏ちゃん。敵襲ですよ~」

「もう少し緊迫感を出しなさい！ 緊張のかけらもないわね」

廊下側に取り付けられている窓から顔を出して確認すると、五組の奴らがここを一直線に目指して来ていた。指揮系統の混乱を生み出す為に本部を狙つて来た心意気は褒めたいけどね。

「ここで、撃破するよ~全軍突撃~。でいいのかな~?」

「任せたわよ、真理」

「任せました~」

ほんとに緊張感のかけらもなくのほほんとした感じだが、本丸の護りを担当してるだけあって信頼できるあたしの親友。国生真理は家が長刀の道場を開いていて、その長女である真理はかなりの腕前だ。この日の為に真理の指導のもと鍛えられた本丸守護部隊はそこらそんじょの男には負けない。

か弱い女の子には武器の携帯が認められているのに対し、素手で戦うしかない男じやね。

「終わりました~」

見ると既に五組の奴らはなんだか幸せそうな表情を浮かべながら、氣絶していた。

「ハチマキ奪つて、体育祭実行委員に連絡。回収してもら~なさい」「了解で~す」

競技が始まつて二時間。そろそろお昼ご飯を食べる時間かな。一旦全部隊を撤退させるか。

「隊長!!」

「どうした!~?」

K隊……川吉からの通信か。声の様子から考えるにただ「じょじょないようだけど、

「奴だ! 危険度Aのディアブロを見つけた!」

その途端あたしの興奮は最高潮に達する。ついに、ついに現れた。あの時の雪辱を、今日こそは晴らしてやる!

「真理、あとは任せたわよ! あたしはあの悪魔を!~!」

最低限必要な無線機だけをハーフパンツのポケットに突っ込み、教室を飛び出す。

「K隊！？」

目標を見失うな。あたしもすぐに到着する

すぐに無線機をポケットに入れようとするが、無線からはノイズ

が聞こえてくる。不審に思い、走りながら無線機を耳に当てる。

「今すぐK隊を後退せろ！…」

いきなり無線機から聞こえてきた声に驚き足を止める。聞き覚えのない声。すなわちあたしが思うことはただ一つ。だれ。

「ちょっとあんた！ 部外者がなに口挟んでるのよ… それにあんた誰よ！？」

「私が誰か。そんな事は今はどうでもいい。さつあと部隊を後退させないと後悔するだ」

この気取った声といい、言い草といい。何から何まで気に触る男だ。誰がどこのマタンゴか分からぬ奴の戯れ事に耳を貸すか。無線を一方的に切ろうとした瞬間。信じられない爆発音が聞こえてくる。

慌てて外の様子を見ると、校庭で川吉達が焦げていて煙りを噴出していた。生きてるのかな、あれって。

「これでわかつただろう。名月院加奈に勝ちたいのなら、私の指示通りに動くことだ」

正直、他人の言う通りにするのは嫌だつたけど、どうしてもある先輩。名月院加奈には負けたくなかつた。星になつた冬羽の為にも。校庭で佇んでいた名月院がゆつくりと私を見上げてくる。その顔には余裕の微笑が浮かんでいた。毎年新入生がその笑みに騙されて、告白するなんて愚行に走つている。それを阻止するためにも、見てらっしゃい、あたしがその化けの皮を剥がしてやるわ。

だからあたしは宣戦布告のつもりで人差し指を名月院に向けた。

「あんたには絶対負けない！…」

その叫びが聞こえたかは分からぬ。多分聞こえたと思う。

全部隊を教室まで退却させ、先程の男から連絡が入るのを待つ間、昼食を食べる。

「ひい、ふう、みい……今の所獲得ハチマキが四十二。ひく六か」

「川吉君達、可哀相でしたね」

彼等は立派な最後を遂げたものよ。死者を労るよりも、その死者の為に勝利しなきや。

「午後の作戦はどうするんだい?」

冬羽も川吉もいなくなつてしまつたので、男子代表の金木が作戦を確認するが、これから作戦を立てるのはあたしじゃないことをやんわり告げる。金木が何かいたそうに口を開いたのと、無線からさつきの声が聞こえてきたのはまさに同時だつた。

「一年一組の諸君。私の名は 刹那だ。勝ちたいのならば私

と共に来るがいい。私は君達に確かな勝利を約束しよう

自信に満ちた声は初めてその名を名乗つた。そして呆気に取られていた私達に向けて、彼は話し始める。勝利への第一歩を。

第10公演「味方になる者 敵になる者」

競技開始から一日が過ぎようとしている。日が落ちて辺りはすっかり暗くなり、今は停戦時間だ、みんなそれぞれ割り当てられた休息場にぶち込まれて休んでいる。

時計に視線を向けても何時なのか暗くてよく分からない。

身体は疲れているのに意識ははつきりとしていて眠ることが出来そうにない。ゆっくり身体を起こした捺夏はそこらに転がっている尻を横目に水を飲もうと教室の外へ出た。

「眠れないのか？ 明日の事を考えるのなら身体は休めておくんだな」

途端、刹那の声が聞こえ、辺りを見回す。そこに広がっているのはただの暗闇。

空耳かと思い歩きだす。

そもそも今日一日あの偉そうな気取った声を聴かされれば幻聴の一つや一つ聞こえてもおかしくない。

「無視とは随分嫌われたものだな」

今度は真後ろからの声に反射的に回し蹴りを繰り出すが、後ろにいた男は右手だけで軽く受け止める。

「あんたが刹那？」

「その通りだ」

怪しい男。

それが捺夏が受けた刹那ね第一印象だ。顔は暗くてよく見えないが、充分怪しげな雰囲気を醸し出している。

「顔くらい見せなさいよ。それにはんただれ？」

「昼にも言つたはずだな。私が誰かそんな事は関係ない。私は君達に勝利を約束する者だ」

やつぱりこいつムカツク奴だと捺夏は再認識する。だが、確かに

この刹那という男の判断力と統率力は抜群だ。

最初は誰もが声だけでどこのクラスかも分からぬ奴に従うのは不本意だったが、刹那の作戦が失敗する事はなかつた。

一日目が終わる頃には、みんな刹那の事を信用するよになつた。

その点では捺夏も認めるが、

「結局さ、あんた何年でどこのクラスなの？ どうしてあたし達に肩入れするの？ それだけはハッキリさせてくれない？ あたしは他のみんなとは違つてあんたの事は信用していないから」

そこが問題だ。この学校に通つている者なのだから、必然的に他のクラスの人間だ。

そうなのにも関わらず、自分達に肩入れする奇妙な刹那の本心を知るまでは捺夏は信用できない。

「……いいだろ？」「うう

少しだけ間があつて刹那が答える。

「私は名月院加奈を打倒するのが目的だ。そしてそれを君達なら出来ると信じた。これでは不満か？」

不満じやない。不満どころか。自分と同じ目的を持つてゐる事に刹那への不信感が少しだけ和らぐ。

「じゃあ、あんたはあの人と同じクラスかもしれないってこと？」

「そうだ」

「正体ばれたらまずいんじゃない？」

「それは君達が心配すべき事ではない」

回れ右をして刹那は歩き出す。

「明日で全てが決まる。私を信じるか信じじかは君次第だ。だが、私は君を信用していることを約束しよう

規則正しい足音と共に声が響いて届く。捺夏は初めて、個人単位で信用していると口にされ、嬉しく感じていた。

日が昇り、一日目の競技開始を告げる放送が流れる。体育祭の一日目は校内全体が熱気に包まれ、一年一組も例外ではなかつた。

最も一年一組の士気が最高潮に達しているのは昨日は姿を見せなかつた刹那が、教室に入つて來たからだ。

男女の例外無く、指示を送る刹那の姿を盗み見る。フルフェイスのヘルメットで顔を隠してはいるが、誰もそれを気にする者はいない。

刹那の指示通りに各隊が配置に付いた事を無線が報せてくる。掠夏はゆっくりと敵を見据え、

「時は今だ。全軍突撃せよ！！」

刹那の言葉と共に、柱の陰から飛び出し。六組の教室に雪崩込む。確かに刹那の読み通り、朝食の弁当を取りに行つてはいるのか、人數が少ない。これなら制圧できる。

突然の奇襲を全く予想していなかつた六組の生徒は対した抵抗も出来ないまま、ハチマキを盗られ、床に崩れ落ちる。

こうしてほぼ同時刻に全ての教室に奇襲を仕掛けた一年二組が一年の覇者となつた。

「現時刻を持ちまして一年が一クラスを残して全滅しました。繰り返し……」

突然の放送に一、二学年の生徒は信じられないと言つた表情で放送スピーカーに視線を注いでいた。

二年六組所属の名月院加奈もにわかには信じられなかつた。

おかしい。この時間帯に奇襲を仕掛けるのには一種の賭け。一年はお弁当を運ぶ人とその人達を守る人を派遣しがちだしそれに朝はどこか大丈夫だと安心してゐる場合が多いから奇襲には持つてこい。だけど、それを同じ一年が行つたのには疑問が残る。

「ぶつ……」

先程放送を終えたスピーカーにまたノイズが走る。今度は何だと思いながら、思考を中断する。

「校内テレビの電源を入れてもらおう」

突如響く聞き慣れない声に従い、教室の前にいた生徒がテレビの電源を入れる。そして、テレビの画面には一人の男が映し出される。学ランを着ているから、男だろう。フルフェイスのヘルメットのせいで確信は持てないが。

『私の名は刹那。一年二組の指導者だ。これより我々は先輩方である諸君に戦いを挑み、勝利する！ 伝統的に一年生がこの体育祭において勝利したことがない伝統を、我々が破壊する！』

一年六組の教室で刹那の演説を聞いていた加奈は興味深く見つめると同時に、危機感を抱いていた。

まさかとは思う。まさか、あれは。しかし、絶対に否定することは出来ない。

『そう、我々の勝利はただの一クラスだけの勝利ではない！ 一年全での勝利となり、歴史に刻まれる。残党兵となつた一年生の諸君に言おう。

歴史に名を刻みたい者は我を求めよ！！

「一年生の諸君は我を恐れよ！！ 私は一年全員の誇りを賭けて戦う事をここに宣言する！」

そこで放送は終了し、刹那も姿を消す。

どうやら加奈が恐れていた事態に陥つたようだ。この演説により一年一組に協力する一年残党が必ず出てくる。そうなつてしまつては勝ち目が。

いきなり教室の後のドアが吹っ飛ぶように開く。教室内にいたほぼ全員がビクッと身体を強張らせる。

入ってきたのは一人だけだった。体操着の色を見ると一年だとうのが分かる。

一番最初に加奈が駆け寄つていく。

「どうしたの？」

優しく問い合わせる加奈に一警した一年生は突然頭を下げ、「あいつを倒す為に力を貸して下せい！」

短く叫んだ。

「俺は、山東政人と言います。どうか、俺を信じて下せい！」

クラスのほとんどが互いに顔を見合わせ

「なに？ あれ」

「知らない」というやり取りをしている中、加奈は何かを考え込み。

「事情を詳しく話して。君が一年生のスパイじゃないって証明して。

「はいっー。」
ね

第10公演「味方になる者 敵になる者」（後書き）

主演／刹那 出演／大門字捺夏／名月院加奈
六組一部の人／山東政人 特別出演／二年

第1-1公演「ステップイン？アウト」

体育祭一日目。午前0時、既に戦局の大半は決していた。一クラスの枠を超えた一年二組がその人数を持つて、二年生、三年生と言つた上級生相手からハチマキを次々と奪い、残つてゐるクラスは二年が六組、三年が三組とそれぞれ一クラスのみだった。

二年、三年がどんなに一年二組に対しハチマキを奪おうと試みても、伏兵、待ち伏せ、罠。の三拍子で逆に返り討ちにあつ。まるで刹那はどんな行動を起こすか見え透いているかのように完璧な作戦を立案していた。

二年六組の教室で加奈が今後の作戦を組み立てていると、偵察から連絡が入る。どうやら三年の最後の皆、三組が陥落したみたいだ。となると次はここ、二年六組に来る。負ければ、そこで競技終了。

「もし、俺達が負ければ一年が優勝つてことにな……」

「あの刹那つて奴訳わからねえよ」

「負けなければいいんです。勝機はあります」

「名月院……」

「恐らく一年の生徒がここに来るまでに使うルートは、A棟の渡り廊下とC棟の渡り廊下です。それに上と下、同じ階からの三つに別かれて来ると予測されます。このルート上には既に地雷を設置しています。そして、**山東君**」

会話の矛を向けられた**山東政人**はゆっくりと加奈に視線を向け、自分の役割を聞かされる。それを聞いた時は一瞬驚きの表情を作つた後にすぐ、決意をして頷く。

一方一年一組の教室では、最後のクラスに勝つ為の作戦会議を刹那を中心として行つていた。刹那が提示する侵攻ルートは三つ、それは、加奈が予想したルート全く同じだった。このまま行けば、加奈の作戦通りに事は運ぶ。

「二つのルートには恐らく罠が配置されている。地雷と伏兵…

…とともに通れば壊滅は必須だな」

「なら、他のルートを使うしかないな」

「いや、予定通りこのルートを使い侵攻する」

この刹那の言葉にはどよめきの声が上がる。それはそうだ罠と知つていながらわざわざそこを通る意味は無い。普通ならばそこは避けて別な道で行くべきだと誰もが思う。

みんなが不安に思うことは承知の上だ。この作戦の目的はただの陽動。本当の目的は、別にある。勝つ為には、

「これより作戦を説明する。三つの正規のルートから侵攻する者はある一定の距離に踏み込むな、あくまで時間を稼げ」

「一年生は二つのルートからの侵攻部隊は地雷原まで踏み込むことはせずに、時間を稼ぐつもりだと思います」

「別働隊は別ルートを使い、一年六組の部隊を背後から攻め、混乱を生じさせろ」

「正面の部隊が時間稼ぎなら、別働隊が背後を突くはずです。しかし、ここで背後の部隊をわざと配置せず敵を誘い込み、伏兵と正面の部隊で一気に殲滅します」

敵正面の部隊に背後を突かれたらどうするんだと言つ意見に、加奈は笑顔を向ける。

「地雷があることを忘れてる? 一年生の正面部隊は地雷が怖くて近づけないはず」

確かにその通りだ。地雷原を突つ切る術があるはずがない。これで正面の部隊に背後を突かれることは無い。後ろにだけ気を使つていれば、おのずと向こう側から罠に引っかかるとま、まさに飛んで火に入るなんとやらだ。

「この体育祭。勝利を手にするのは」

加奈と刹那は同時に、

「我々である!」

宣言した。

それを合図に両軍が動き始める。正面から突っ込む部隊は金木を含んではいるが、基本的に女子が多い部隊。これは正面の部隊はただの囮だと言う事が伺い知れる。別働隊には男子を多く含み捺夏もこっちの部隊にいる。

午前0時半。体育祭の熱狂もそろそろ衰えてはいいんじやないかな。と思うのだが、生徒諸君は誰もがみんな元気で最後の作戦へと突っ走っている。

午前0時三十五分。ついに両軍が激突し状況は大方加奈が予想していた通りに進んでいった。背後を突いたはずの一年生部隊は逆に挾撃され劣勢状態に陥った。そんな中、背後を突く部隊と一緒にいたはずの捺夏は人気の全く無い特別棟を一人で移動していると、目の前に一人の男が躍り出でくる。

「政人！？」

「捺夏か！！」

一年生でありながら一年生側についている山東政人だった。捺夏とは同じ小学校という事もあり昔から仲は良かつた。

「奴はどこだ！？」 刹那はどこにいる！！

「さあね」

「だつたら無理矢理聞き出すまでだ！」

便所モップ両手に持ち、振り回して政人が迫つてくる。振り下ろされる右のモップを左に身を半身だけ引き回避し、左から迫る難ぎ払いを飛んで回避し、地面に着地すると共に後ろへ飛び引き距離をとる。

「男子は武器禁止なんんですけど」

「さあ言え！ 刹那は何処だ！？」

「知つていても言うわけ無いだろ

「そつか……なら、ここで終わりにする！！」

左手に持つていたモップを投げつけてくる。飛んで来るモップを右に回避するが、その隙に政人は間合いを詰め、避けたばかりの捺夏に向かって両手で握ったモップを振り下ろす。

これでは、いつかの冬羽と逆だ。どちらと捺夏の脳裏をよぎりた瞬間、振り下ろされていたモップがすんでの所で止まつた。後ろを振り返ると、何故かどこかの高校のブレザーを着てこる冬羽が片手でモップを掴んでいた。

さて、どうした事かね。捺夏の頭にモップが振り下ろされそうだつたんで思わず出てきて止めてしまつたが、今の俺の服装じゃ明らかにおかしいだらうな。どつかの高校のブレザーだもんな。まあ仕方がないつちや仕方が無いけどね。

「で、これ何？ お前誰？ 何でこんな事態になつてんの？」

「冬羽……？ どうして」

「どうしてもこうしても、まずは俺に事態説明してくれてもいいんじゃない？ 何が起つてているのやら」

「何だお前は！？ お前も邪魔をするところのなら…」

「いや、だからね何で君が便所モップ片手に捺夏を襲つて……」

便所モップを俺の手から無理矢理引き離すと、それでまた襲い掛かつてくる。つたく聞き耳持たずか？ 少しは人の話を、

「聞けつててんだよ！…」 じちとら今まで拉致されていて意味がわかんねえんだよ！！」

持つた場所は便所モップではなく右腕。後は腰に背負つて足を払つて一気に身体を回しながら腕を引き抜く。一本背負いを綺麗に決めて地面に襲い掛かつてきた男を叩きつける。前世で警察になる為に空手と剣道と柔道を学んだ俺をなめるなよ、この野郎。

「で、これ何？ 一体どうなつてんの？」

俺の問い掛けに呆然としていた捺夏が我に返る。よつやく説明してくれるか、さて一体どうなつてゐるやら、捺夏がここに居るつてことはまだ、一年一組は負けていないよつだが。

「そうだ、刹那は！？」

「つておいしい！？ 刹那つてだれ！？ この状況どうじろと！？」

少しは説明しろよ！！」

聞きなれない名前を言い残して捺夏は走つて行つた。なんとなく後を追うのもめんどくさかつたし、本当に今の状況何一つ分かつてないので俺に何をどうしようと。誰か俺の前に来て説明しろ。今はどうなつているんだ、何処のクラスが優勢なんだ。一日中拉致監禁されていた俺にも分かるように丁寧に一から話してくれ。

丁度良いタイミングで向こう側から誰かが走つて来てくれた。よしあの人に今がどうなつてているのか聞いてみるか。

「すみません。今つてどうなつてんですか体育祭」

「はあ！？ なんでそんな事知らないって……君、この学校の生徒？ 何年？」

ブレザー姿の俺を見てその質問は妥当だね。俺は一年生であることを告げると人のよそうな上級生の先輩はたちまち顔色を変えて、「だつたら敵じゃねえか！！ なに普通に話しかけてんだよ！」

などと訳のわからない事を叫びながら襲い掛かってくる。いや、そりや確かに上級生なら一年は敵だらうけどさ、何でそんなに殺意を持つてるんだよ。

「だつからう。俺は拉致されていて今の状況わかんねえんだよ！」

腰から木刀でも引き抜いて相手の頭をかち割りたい気分だったが、平和的解決を望む俺はパイルドライバーで終わらす事にした。した後に少し後悔したが、まあこの状況を説明してくれないんじゃ用なしだあばよ。

まああれだな、人間腹が減つていると何処までもダークな存在になれる事を今俺は実証している。折角だからハチマキ一人からもうつておくか。

「なんだてめえ！！ よくも二人を！」

「いやね俺だつてやりたくてやつた訳じやないですよ、襲つてくるから仕方なくつて……どいつもこいつも少しは人の話を聞けつ！！」

今度は大勢の先輩方が襲い掛かってきやがったので、近くに落ちていた便所モップを片手に振り回しながら襲つてくる暴漢を倒していつたさ。まさに千切つては投げ、千切つては投げの状況だ。自分のことながら随分凄まじい技を習得してたな。

「うわっ！？」

「なんだ、こいつ！？」

「便所モップきたねえ！？」

などの叫びを聞きながら一切の手を休める事無く、排除していく。気がついたら大勢の先輩が地面に倒れていた。やれやれ途中の記憶が無くなるなんて、随分危ないな。記憶が無いから後で何か言われても責任取れないしな。まああだ。正当防衛ついでにハチマキでも全部もらつておつか。

それにして腹減つた。何処かに食べ物落ちてないかな。ああ、落ちてる物拾つて食べたら腹下すかもしくはそれに順ずる何かになるなきつと。

「おわっ！？ 何この状況！？」

A棟に移動してみると、あちらこちらに屍が転がつていた。良く見ると一年二組の生徒も多々存在している。一体何があつたのやら。近くに金木が転がつていたので起こしてやる。

「おい、金木。生きているか？ 何があつたんだ？」

ついでに今の状況をご説明願つたが、金木は俺に体育館に行くんだ。と言い残して事切れた。死んじやいなけどな。

にしても体育館だつて？ なんだそこで今の状況が分からない人たちの為に体育祭実行委員の人達が講習会でも開いてくれているつてのか。ま、訳が分からぬ以上校舎をぶらついて情報収集をするしかないか。金木の前で手を合わせた俺は体育館に向けて歩き出した。

何歩くらい歩いたか、まだそんなに歩いては居なかつたと思うが、いきなり足元で「ピピピッ」という音が響き下を見た瞬間目の前が爆発した。こんな所に地雷を仕掛けておくとは、部長しかいないな。

幸いブレザーも顔も少し焦げただけで重傷は負っていない。

とぼとぼと体育館まで歩いていくと、体育館のステージに立っている学ランにフルフェイスのヘルメット野郎と部長が互いに銃を向けていたし、何かその後ろで捺夏が信じられないものを見た感じにガクガク震えていたし。えーと、何これ？ 何かのショーですか？

「撃てるものなら撃つてみるがいい！！」このダイナマイトを！」

何かヘルメット野郎が学ランに無数のダイナマイト括り付けてるんですけど、頭おかしいんじゃないですか。

「この世界に言い残すことは？」

「酷い、何気に部長酷いし殺す気満々だよ。

「名月院つ！！」

「刹雪！」

え？ 僕？ 何で部長俺の名前叫ぶんですか？ 僕こっちですか？ そんなフルフェイスダイナマイト頭おかしい変人野郎じゃないですよ、ちょっと！？

俺のツツコミニを無視して事態は進行し、体育館中にダイナマイトの爆発の煙が充满する。もはやむちゅくちゅだなおい。

「部長！？ 捺夏！？ それにえーと仮面男！？ 生きてる！？」

最初に見つかったのは、気を失っている捺夏だった。捺夏を背負い部長を探し始める。

どこをどうすれば、体育館の開いていた扉から繋がっているプールにまで吹き飛ぶのかは分からないが、部長をプールの中で発見。即座に助け出さないと部長がこの世の人間じゃなくなるので、捺夏を体育館に寝かせプールへと飛び込む。

その途中後ろから「ツチ」なんて聞こえてきたけど、きっと幻聴だね。

ここから先の話は後日談になるが、あの例年に類を見ない体育祭の全貌が明らかになつた。俺が拉致された一日日に一年二組に謎の少年Aとしておこなうか。その少年Aが接触したという。その後謎の少年Aは一年連合軍を組織し、一、三年生に戦いを挑んだそうな。

しかし最終決戦において部長の読みが少年Aの上を行き、あえなく瓦解。部長は体育館で少年Aを追い詰めたそうだ。

「ここからが俺も思わず顔を捻つてしまいたくなるのだが、部長は少年Aの正体を俺だと思っていたようだ。あの体育館でそれを言った時にその少年も肯定した。だから事前に俺と会っていた捺夏は困惑していたということだ。

俺の事について言えば、俺がその少年である可能性はゼロだ。何故なら俺がそうだと知っているから。俺がブレザーを着ていた事について言えば、部長に捕まつた檻の中で何とかみんなと連絡を取れないか無線機を取り出した時に誰かが入つて来て、変なスプレーがまされて眠つてしまつた。

後はもうお解かりの通りだと思つが、その後まる一日を特別棟の教室に眠つたまま監禁され、一日田のあの時に廊下で捺夏と馬鹿一人がやけにたつるさかつたんで、目を覚ましたらブレザー姿でこんなで行くのは少しまずいんじやないかなと思つたけど、結局は出て行つて、現在に至るというわけだ。

ああ。最後に俺が来ていたブレザーだが、あの制服は以前俺が通つていた高校の物だつた。まあそれが何を意味するか分かつたのはもつとずっと後になつた事だけだ。今は、体育祭の勝利に喜んで、体育祭の勝利祭でみんなと一緒に騒ごうか。

本当にこれが最後になるが、河原市立河原中学校体育祭において、この年以外で一学年が優勝する事は無かつたそうだ。

第11公演「ステップイン？アウト」（後書き）

主演／刹那／大門字捺夏

出演／冬羽刹雪／名月院加奈／金木／川吉／山東政人

特別出演／体育祭実行委員の方／放送委員の方

友情出演／国生真理／二年六組の生徒一部／一年二組の生徒全員

第1-2公演「過去には決別をしかるべき未来には？」

「ゴールデンウイークも体育祭も中間テストもその後に続いた様々な学校生活もそして一学期の長すぎるハゲ校長の話も、全ては過ぎ去った時間の如く過去の日となり、今は七月の中旬。一般的に小、中、高校生が待ちわびていた夏休み初日。俺はどういう理由でかは知らないが、とある山に来ていた。

そう、また山なのだ。しかも今回の来訪した山は「ゴールデンウイークに訪れたあの山ではない。もつとこいつ田舎な山だ。どうして山に来ているかと言えば、それはやはり部長が行きたいと言つたから、情報部の活動としてといえどお分かりだらう。

ベースキャンプから少し離れた山の中。下り斜面の岩に腰を下ろし、空を見上げる。もっとも、木々が邪魔でその向こいつの青空は見えなかつた。

思い起こせば一日前、始業式の前日の口に部長は高らかに宣言した。

「夏休みの合宿を行います！」

「……合宿ですか？ 何処で？」

図書室から拝借して読んでいたハードカバーの本から顔を上げ、部長を見ると部長はこ機嫌そうな笑顔で瞳をこれから遊園地に連れて行つてもらえる子供のように輝かせていた。俺の質問に部長はこう答えた。

「明治政府の小判を探しに行く！」

「……はい？」

さて、俺の耳がおかしくなつてしまつたんじやないかと耳を思わず疑つたね。一体何処の誰が、明治政府の小判なんて単語を素早く

理解できるだらうか。もし理解できるぞなんて猛者がいたらこの部にぜひ入部してくれ。通訳としてな。

「徳川の埋蔵金の間違いじやないんですか？」

「……刹雪つてそんな事信じてるんだ？ 子供だね？」

じゃあ明治政府の小判なんて突飛な事を言い出して、中学一年生になつてもなお未確認生命体の存在を一途に信じ続け、さらにじF0や幽靈を追い掛け回している部長はどうなんでしょうか。俺よりもよっぽど子供というか、何かそんな感じじやないですかね、少なくとも部長に子ども扱いされる覚えはない。

「これから時代はこれでしょ？ でしょ？」

「ただでさえ前の体育祭のせいで白い目で見られてるんですから、これ以上やると訴えられますよ。色んな人たちに」

つたく、本当に禁……世迷言です。

部長が感化された論文は何だと思いながらパソコンのディスプレイを覗き込む。色々な文が長々と載つてはいたが、タイトルを見ただけでも、これが何を言いたいのかは分かつた。理解できた。ちなみにタイトルは『何処に消えた昔の通貨。小判の末路つてゆうか金は消滅しないし』という何とも碎けた内容だった。

多少の脱力感を感じながらその論文に目を通すと、確かに頷きたくなる箇所が無いわけではない。というわけで頷きたくなる意見。その一。昔の通貨は小判。つまりは金であったがそれは何処に消えたか？

俺なりの答え。確か海外の国とかにぼんぼんぼんぼん輸出したんじゃなかつたつけ？ 前にテレビでそんなこと見た気がする。

その二。一で述べた小判消滅説は実は江戸幕府の後の明治政府。つまりは基となつた長州と薩摩が全て回収し隠したという説に飛び火する。

するのかな？ 飛び火。すまん誰か教えてくれ、本当にこの論文の言つていることが真実なのかどうかを。

その三。というわけで以上のことを踏まえた上で、我々の独自の

調査により怪しげな山を発見した。さあ今すぐ向かおう謎の渦巻く金山へと!!

行くか！ つてか何この読んだ人を強制的に山へと誘うような論文ってかほんとに論文かこれ？ 何処の誰が書いた物だよ。

その疑問は速攻で解消された。何故なら文の一番最後に蟹渡圭吾と書いてあった。あの、ストーカー、よからぬ知識ばかり部長に詰め込みやがつてもう一度RPGで浄化してやろうつか。

「これは灯台もと暗しの言葉通りだね。と言う訳で我が河原特捜情報部の夏合宿は夏山で一夏を過ごうに決定」

「一夏を全て山で過ごす気ですか？ お風呂とかどうすんですか、その山に別荘兼部室でもあるんですか？」

「細かい事は実行した後で決める。後悔した後に反省するのと同じ事ね」

すみません。全く意味が分かりません。それはそうと最近部長キヤラ変わってきてませんか、なんとなくそう思えて仕方ないのですが、俺の気のせいならいいけど。

そんなこんなでその日の内に荷物をまとめて畠田の早朝に出てきたのだが、今回は出掛けに妹が玄関まで見送りに来てくれて、行かないでお兄ちゃん。寂しくなるよなんて、

「言つわけないでしょ。バカじやないの？ ま、くれぐれも犯罪だけには手を染めないでよね。犯罪者の妹なんて嫌。もしなつたら絶対にあんたの息の根止めるから」

妹よ。それも立派な犯罪だ。

そんな心温まるたつた一人の兄妹のやり取りをしてから、駅へと向かう。にしてもまた移動が電車とはね。名月院の自家用ジエットでもリムジンでもブラックホールでも飛ばして欲しいもんだ。

駅に着くと待ち合わせ時間の五分前だと言うのに部長は既に待っていた。俺が謝ると部長は笑つて十分前行動と言つていた。五分前行動じやなかつたつ。

前とは違い下り電車に乗り込み走る事三十分。懐かしい街が見え

てくる。石原市。俺が前世で高校時代を過^はした街だ。

「ここで別の路線に乗り換えね」

「石原駅か」

「前に来たことがあるの?」

感慨深く呟いた俺に部長が質問する。

「ええ、ずっと昔に来たことがあります。もつ何年も前の事ですかね」

電車が駅のホームに滑り込み、停車する。ドアを開きホームに降り立ち、大きな荷物に顔をしかめていると、向こう側から見慣れた顔が二つこちらに向かつて歩いてきていた。

あのアホ面は新井和也^{あらいかずや}そして、その隣で涼しい顔をしているのは、藤堂祐一^{ふじじょうゆういち}。七年ぶりに再会したかつての親友が歩いて来ていた。俺は嬉しくなり思わず声を掛けようとしていた。

「あつ……」

声を掛けることは出来なかつた。当然の事だ向こうは俺を知つてゐる訳が無い。一人は談笑しながら俺の横を通り過ぎていく。ただの道行く人として俺達は互いに何処に行くかも分からぬまま、無数の人とすれ違つよう、ただすれ違つただけだつた。

思わず後ろを振り返る。そこにはやはり新井と藤堂の姿があつて、でも一人に前のように気軽に声を掛けれなくて、その後頭部を叩く事も出来なくて。

「どうしたの? 知り合いでもいたの?」

「いえ……なんでもないです」

「なら、いいよ」

そして、俺は歩き出す。後ろに広がる過去には決別を、そして前に広がる未来へ歩き出す。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4791c/>

セカンドライフ、僕らの季節

2010年10月21日05時27分発行